

《論 文》

『ボヴァリー夫人』講義（下）¹⁾
——光，影，湯気，匂い，音，媒介——

尾 河 直 哉

Un cours sur *Madame Bovary* III

NAOYA OGAWA

キーワード

19世紀フランス文学（littérature française du 19^e siècle）、写実主義（réalisme）、ギュスターヴ・フロバール（Gustave Flaubert）、『ボヴァリー夫人』（*Madame Bovary*）

7章. 媒介

前章では鏡というテーマ系について見てみました。鏡はたんに起源的実体を反映し、その分身を生み出すばかりでなく、分身の方から起源的実在に「なにか」（意味，価値，認識，出来事など）をもたらしているようにみえることを指摘しました。「男前が上がった」という評価をシャルル本人にもたらししたのは鏡のなかの分身であるような書き方がなされていまして、「貞淑」という自己評価をエンマにもたらししたのは半ば鏡のなかの分身です。極め付きはエンマの死。小康状態を保っていたエンマを一気に死に追いやったのは、鏡の中にみずからの分身を覗き込むという行為でした。鏡のなかの分身が起源的実体であるエンマに「死」という出来事をもたらしたと言って過言ではないでしょう。こうして、起原的実体よりもむしろ、鏡に映ったその分身のほうこそが意味や価値や認識や出来事をもたらしているのです。

こうしたなにかをもたらす働きは、とはいえ、鏡だけにかぎられているわけではありません。『ボヴァリー夫人』にしばしば描かれる「窓」も、一部はそうした働きを担っていま

す。以下の引用の窓は「思い出」をもたらします。

27. ひとりの下僕が換気のために椅子に乗って窓ガラスを二枚たたきこわした。ガラスのわれる音を聞いて、ボヴァリー夫人はふり向いた。すると、窓ガラスにくっついて、こちらを見詰めている百姓どもの顔が庭に見えた。たちまちベルトーの思い出が彼女の胸に浮かんできた。農場や、泥深い沼や、仕事着をつけて、りんごの下に立っている父親の姿が見えた。昔のように、搾乳場のなかで、鉢の牛乳からクリームを指先ですくいとっている自分の姿も見えた。しかし現在のこのはげしい稲妻に照らされると、いままではっきりしていた過去の生活がことごとく消え失うせて、本当にそんな生活をしたのかさえも疑われた。

Un domestique monta sur une chaise et cassa deux vitres ; au bruit des éclats de verre, madame Bovary tourna la tête et aperçut dans le jardin, contre les **carreaux**, des faces de paysans qui regardaient. Alors le souvenir des

Bertaux lui arriva. Elle revit la ferme, la mare bourbeuse, son père en blouse sous les pommiers, et elle se revit elle-même, comme autrefois, écrémant avec son doigt les terrines de lait dans la laiterie. Mais, aux fulgurations de l'heure présente, sa vie passée, si nette jusqu'alors, s'évanouissait tout entière, et elle doutait presque de l'avoir vécue.²⁾

ヴォービエサールの館。催されているのは夜会ですので当然夜。外は闇です。エンマが窓に目をやると百姓どもが闇のなかで窓ガラスにくっついてこちらを見ている。エンマは百姓の顔を見て、生まれ育った農場ベルトーのことを思い出し、やがて父親と自分の姿を脳裏に映し出します。

『ボヴァリー夫人』において窓は劇場の舞台のような役割を果たしていると指摘されることが多いようです。たしかにここでも、窓の向こうにまるでベルトーで父親と暮らしていた時代の一コマが再現されているように感じられるわけですから、これを劇場と言っても間違いはないでしょう。ただ、ここでは窓が劇場よりもむしろ半ば鏡、半ば映画のスクリーンのように感じられます。窓に現れた百姓の顔に、過去の父親と自分の姿を認めているわけですから、窓が半ば鏡のような働きをしているとはいえないのでしょうか？ 窓は過去の自分を反映しているわけです。半ば映画のスクリーンのように感じられるのは、宵闇に塗りつぶされた窓が暗幕＝スクリーンになって、そこに百姓の顔が映し出され、その後、あたかもそこに投影されるフィルムのごとく、過去の父親と自分の思い出が動画として繰り広げられているように思えるからです。さながら窓というスクリーンに〈媒介〉されて初めて思い出が映し出されているような印象がある。そう言ったらよいのでしょうか。

瞼が銀幕ならざる暗幕のスクリーンになって、まるでそこに投影されるように夢が展開する例もあります。

28. エンマはパリの地図を買い込んだ。指先で図面をたどりながら、都じゅうをほうほう駈けまわった。一つ一つの町角、通りの線と線のあいだ、家をあらわす白い四角の前に立ちどまりながら、広小路をのぼって行った。しまいには眼が疲れてくると^{また}瞼を閉じた。するとガス灯の炎が風にはげしくゆらめくのを、劇場正面の列柱の前に、そうぞうしく下される馬車の踏段などが、闇の中に見えてきた。Elle s'acheta un plan de Paris, et du bout de son doigt, sur la carte, elle faisait des courses dans la capitale. Elle remontait les boulevards, s'arrêtant à chaque angle, entre les lignes des rues, devant les carrés blancs qui figurent les maisons. Les yeux fatigués, à la fin, elle fermait ses **paupières**, et elle voyait dans les ténèbres se tordre au vent des becs de gaz, avec des marchepieds de calèches, qui se déployaient à grand fracas devant le péristyle des théâtres.³⁾

シャルルとの結婚生活に嫌悪感を抱くエンマは、パリへの憧れを募らせます（ちなみに、エンマがヨンヴィルを出て行けた先はルアンだけで、パリにはついぞ出られませんでした）。地図を買い込んであれこれと夢想する。疲れて瞼を閉じます。すると全体が闇に包まれ、そこに夢が投影されるわけです。もちろん瞼がスクリーンになったとはどこにも書かれていません。でも、眼と瞼の関係を考えると、これが映写機とスクリーンの関係に類比的であることはどことなく納得できませんか。闇に包まれた劇場で上映される映画を知っているわれわれとしては、瞼の裏の暗闇に映し出される動画が、劇場の上演の比喻よりもはるかに映画の比喻のように感じられる。窓や瞼が「あたかも」スクリーンのように思い出や夢を映し出しているのです。そしてその思い出や夢がエンマにとって現実をはるかに凌ぐ意味＝重要性を

もっていることはもはや言うまでもありません。

農業共進会におけるロドルフとの逢引きの場面でもこの「瞼」と「窓」が現れています。ちなみにこの場面は、これまでみてきた匂い、雲、埃、光、反復音のテーマ系が総動員されて、まるで音楽でいうところのトゥッティのように大合奏を奏で、夢想と思い出の綯い交ぜになった陶然とした印象を掻き立てています。

29. 彼は両腕を組んで膝の上に乗せていた。そしてその姿勢でエンマの方を見あげながら、近くからじっとその顔を見つめるのだった。エンマはロドルフの眼のなかに、小さな金線が黒い瞳のまわりに放射しているのを見た。そしてロドルフの髪をつやつやさせているポマードの匂いさえ感じた。するとエンマはうっとりとして、ヴォビエサールでワルツを踊ってくれたあの子爵のことを思い浮かべた。子爵の鬚もこの髪の毛と同じようにヴァニラとレモンの匂いを散らしていた。エンマは、もっとよくかごうとして眼を細めた。しかし椅子にそり返りながら、そうして眼を細めた途端、はるか地平の果てに古ばけた乗合馬車の「つばめ」が見えた。それは長い土煙をひきながら、ゆるやかにルウの丘をおりてきた。レオンがあんなに幾度も彼女の方へ帰ってきたのはあの黄色い馬車だった。そして、レオンが永久に去ってしまったのは向こうのあの街道だった！ エンマは向いの窓に彼の姿を見るような気がした。すると、なにかもかがいっしょになった。雲のようなものが通り過ぎた。子爵の腕に抱かれながら光りかがやくシャンデリアの下にいまもワルツを踊っているような、またレオンが近くにいていまにもやってくるような……。それでいてやはりロドルフの顔を間近に感じていた。この快感はこうして彼女の昔の欲望のなかにしみ

入った。欲望は風にあおられた砂粒のように、魂の上にひろがる霊妙な香りの息吹のなかに渦巻いた。エンマは幾度も大きく鼻をひろげて柱頭からまる鶯のすがすがしい香りを吸った。エンマは手袋を脱いで手をふいた。それからハンカチで顔をあおいだ。一方では、顫顫の動悸の音を通して、群衆のどよめきや、式辞を単調に読みあげる参事官の声が聞こえていた。

Il se tenait les bras croisés sur ses genoux, et, ainsi levant la figure vers Emma, il la regardait de près, fixement. Elle distinguait dans ses yeux des petits rayons d'or, s'irradiant tout autour de ses pupilles noires, et même elle sentait le **parfum** de la pommade qui **lustrait** sa chevelure. Alors une mollesse la saisit, elle se rappela ce viconte qui l'avait fait valser à la Vaubyessard, et dont la barbe exhalait, comme ces cheveux-la, cette **odeur** de vanille et de citron ; et, machinalement, elle entreferma les paupières pour la mieux respirer. Mais, dans ce geste qu'elle fit en se cabrant sur sa chaise, elle aperçut au loin, tout au fond de l'horizon, la vieille diligence l'Hirondelle, qui descendait lentement la côte des Leux, en traînant après soi un long panache de poussière. C'était dans cette voiture que Léon, si souvent, était revenu vers elle; et par cette route là-bas qu'il était parti pour toujours ! Elle crut le voir en face, à sa fenêtre, puis tout se confondit, des nuages passèrent ; il lui sembla qu'elle tournait encore dans la valse, sous le feu des **lustres**, au bras du vicomte, et que Léon n'était pas loin, qu'il allait venir... et cependant elle sentait toujours la tête de Rodolphe à côté d'elle. La douceur de cette sensation

pénétrait ainsi ses désirs d'aurefois, et comme des **grains de sable** sous un coup de vent, ils tourbillaonnaient dans la bouffée subtile du **parfum** qui se répandait sur son âme. Elle ouvrit les narines à plusieurs reprises, fortement, pour aspirer la fraîcheur des lierres autour des chapiteaux. Elle retira ses gants, elle s'essuya les mains ; puis, avec son mouchoir, elle s'éventait la figure, tandis qu'à travers le **battement** de ses tempes elle entendait la rumeur de la foule et la voix du Conseiller qui psalmodiait ses phrases.⁴⁾

下線部にご注目ください。エンマはロドルフのポマードの匂いをもっとよく嗅ごうとして瞼を半ば閉じます（翻訳では「眼を細めた」となっていますが、原文では「瞼を半ば閉じた」となっています）。おそらく匂いに意識を集中するためでしょう。ところが、そうしたとたんに地平の果てに「つばめ」が見えてくる。なぜでしょうか？ この「つばめ」は現実の「つばめ」でしょうか？ もしそうならなぜ瞼を半分閉じたとたんに見えたのでしょうか？ 翻訳のように「眼を細める」という日本語が示す仕草なら、近視のひとが遠くのものを見ようと焦点距離を調整するために眼を細める仕草にも取れそうです。でも、エンマがなにか遠くのものを見ようとする意図はこの文脈にありません。ここには訳出されていませんが、瞼を半ば閉じる行為にmachinalementすなわち「無意識に」という副詞が添えられていることからそれはわかります。したがって、もしこれが現実の「つばめ」だとするなら、考えられる唯一の説明はこうでしょう。視界の一部、とりわけ近くのもの、の視界遮断した結果、意図せず遠くのものに視野が集中する状態が起こり、たまたま通りかかった「つばめ」が見えた、と。しかし、これが現実の「つばめ」ではなく、エンマの思い出のなかの幻想の「つばめ」だったらどうで

しょう？ 引用28のばあいと同じように、瞼を半ば閉じることによって、エンマは夢想（幻想）に耽り、思い出のなかの、あるいは記憶のなかの「つばめ」を幻視したのだ、という解釈が可能ではないでしょうか。「つばめ」はたして現実なのか？ それとも幻想なのか？ 幻想であるという決定的な証拠はありません。ただ、現実と言い切ってしまうためにはどこか無理な解釈が必要です。そこでこう考えたらどうか？ エンマの視野に入ったのはたしかに現実の「つばめ」だけれども、エンマはそれをまるで幻想のように見たのだと。瞼が半ば閉じているのは、現実を半ば拒否して幻想の世界に片足を踏み込んでいる証拠ではないでしょうか？ つまりエンマはロドルフとの恋という場面で、ポマードの匂いにうっとりとなりながら、現実と夢を混同し始めているのです。「すると、なにかかもがいっしょになった」という文言がそのあたりの事情を明かしています。そしてその文言の前に来ている文が波線部。「エンマは向いの窓に彼の姿を見るような気がした」となっています。慎重にも「気がした」という言葉（原文では「信じる」や「思う」を意味するcroireの単純過去crut）が差し挟まれています。幻想と現実が混じりあい、滲み合っていることがわかります。そして幻のレオンを映し出すのはまたしても「窓」なのです！ 窓はここでもエンマの思い出を映し出すスクリーンのような働きをしています。窓や瞼はこうして思い出や夢を投影する映写幕、スクリーンのような働きをしているわけです。

ところで投影とは何か？ 起源的実体の影あるいは光を、ひと言でいえば起源的実体の分身ダブルをスクリーンという非透過物に反射させて出現させることでしょう。これまで見てきた光や影と同じ境位にあることがお分かりになると思います。フランス語でprojection。「投影する」を意味するその動詞形はprojeterで、pro（前に）+jeter（投げ出す）という組成から成り立っています。このprojeterという動詞が現れていくだりる条を読んでみましょう。

30. 未来のさまざまな幸福は、熱帯の浜辺のように、その国のけだるさを、かぐわしい微風を、前方に横たわる無辺の大海原に投げかける。人々はまだ見えぬ島かげには心も止めず、その陶醉のなかにまどろむのである。

Les bonheurs futurs, comme les rivages des tropiques, projettent sur l'immensité qui les précède leurs mollesse natales, une brise parfumée, et l'on s'assoupit dans cet enivrement, sans même s'inquiéter de l'horizon que l'on n'aperçoit pas.⁵⁾

エンマがレオンと散策する場面です。エンマとレオンの関係は二度にわたりますが、一度目はいわゆるプラトニック・ラブであって肉体関係はありません。場面は、その一度目の関係の一コマであることを念頭に置いて読まないといささかわかりにくいと思います。レオンとエンマの恋愛関係が、熱帯の浜辺の比喩で語られています。暑く甘い恋の懶惰さが熱帯の浜辺の比喩で語られること自体は紋切型に属していると言っていいでしょう。ここでテキストは恋の懶惰な甘美さを伝えるとともに、それが紋切型に過ぎないというメッセージも発していることは間違いありません。

さて、比喩するものと比喩されるものを確定しておきましょう。少し和訳から離れて直訳します。比喩するものは〈熱帯の浜辺は、そこで生まれたけだるさを、芳香を放つ微風を、浜辺の前に広がる無辺の大海原の上へと投げかけている〉とまとめられるでしょう。l'immensitéとは「広大無辺さ」という抽象名詞ですが、この文脈の比喩するものの具体的な水準では和訳にあるように「無辺の大海原」となることは間違いありません。つまりここで熱帯は陸地と海とに二分されていて、浜辺で代表される陸地は、本来そこに属している要素（「そこで生まれたけだるさ」、 「芳香を放つ微風」）を海へと投げ出すわけです。ところで、「投げ出す」と

訳した動詞projeterを「投影する」と訳し直してみます。すると、この比喩の裏にもうひとつ別の比喩が隠されていることが感得できます。〈^{プロジェクター}投影機は起源の実体の分身を^{ダブル}映写幕に^{スクリーン}投影する^{プロジェクト}〉という比喩です。ここで起源の実体は本来陸地に属している要素ですから、「そこで生まれたけだるさ」(leurs mollesse natales)と「芳香を放つ微風」(une brise parfumée)にあたります。natales（「そこで生まれた」）という形容詞がけだるさの起源性をよく表現していますが、parfuméeという形容詞の名詞形であるparfumは、匂いのテーマ系を見た4章で明らかにしたとおり、起源の実体から発された匂いですから、parfuméeという形容詞はむしろこれそのものが起源の実体の分身であることを示唆しています。いずれにせよ、無辺の大海原がスクリーンとなって、そこに陸地（^{ダブル}投影機にして起源の実体）から発された分身が投影されているさまが感得できると思います。

次に比喩「される」ものを確定しなければなりません。ところがこれが意外とむずかしい。もちろんエンマとレオンの恋が比喩されている対象であることは言うまでもありません。しかし、比喩するものの各要素が比喩されるもののどの要素と対応しているのかがにはわからない。陸地（浜辺）はなにを意味するのか。海はなにを意味するのか。どうもあまりはつきりしません。どうしてはつきりしないのか。おそらくはつきり言うことがためらわれるものを含むからでしょう。そう考えてみると逆説的にこの要素が浮かび上がってきます。陸地にあたるのは肉体関係を伴う恋愛ではないか。そして海に投影されたのは、肉体的愛の予兆あるいは予感としての前＝味⁶⁾ではないでしょうか？ l'immensité qui les précèdeという表現にご注目ください。précéderという動詞がここでは「熱帯の浜辺の前に位置する大海原」という地理的な先行性で使われているのですが、これを時間的な先行性にとって比喩される恋愛関係にあてはめれば、「肉体関係に先立つ非肉体的な関係」となります。つまりここで比喩され

ているのは、〈肉体的恋愛はその快楽の分身^{ダブル}を（このばあいのレオンとエンマの）非肉体的恋愛に投影している〉という事態になります。

そこで初めて原文中のl'horizonの解釈が正しくできるようになります。波線部をご覧ください。邦訳では「人々はまだ見ぬ島かげには心も止めず、その陶酔のなかにまどろむのである」としています。l'horizonにあたる訳語は「島かげ」しか見当たりませんが、なぜ急に「島かげ」が出てきたのでしょうか。浜辺と大海原の連想からおそらく熱帯の浜辺を、熱帯の島の浜辺と読み込んだのでしょうか（その可能性もいちがいには否定できませんが）。l'onと不定人称代名詞で指示されたエンマとレオンはこの大海原を漂っている。そして肉体関係であるところの島が前方の視野に入っていないがゆえに、肉体関係のもたらすやっかいを思い煩う気遣いもなく、肉体関係のもたらす前味だけをまどろみのなかで陶然として味わっている、というストーリーになると思います。このストーリー自体はこれで間違いのないと思いますし、熱帯の浜辺が大陸にあるか島にあるかはこのさいさほど重要ではありません。ただl'horizonを「島かげ」としたのはやはりおかしい。このl'horizonは「先々の展望」というか、肉体関係とその後のやっかいを含めた「この先に待つもの」くらいの意味ではないかと思います。それが地平線にせよ（陸地）、水平線にせよ（海）、空との境目を成す線が、つまりは行き着く先が見えないということです。いずれにせよ、エンマとレオンはこの先に待ち構えている起源的実体＝肉体的恋愛を忘却し、そこから切り離された遠い場所にいるからこそますます陶然として、そのスクリーン＝大海原への反映・投影である肉体的恋愛の分身^{ダブル}を味わっているのです。

ここで興味深いのは、抹消された、あるいは遠くに引き離された起源（肉体的官能）よりもむしろその分身^{ダブル}（その予感＝前味）の方にこそエンマが陶然としているようにみえるという点です。起源的実体そのものよりも、なにかに移された（あるいは映された）その分身^{ダブル}にむしろ

感応＝官能してしまうフェティシズムについてはすでにふれました。『ボヴァリー夫人』のテキスト全体がこのフェティシズムに浸っているということも申し上げました。それは次のような条にも表れています。

31. レオンの姿が一そう大きく一そう美しく一そうしとやかに一そうおぼろに浮かんできた。レオンは彼女と別れてはいても、彼女のもとを去ったわけではなくそこにいた。家の壁は彼の影をとどめているかのように思われた。

Léon réapparaissait plus grand, plus beau, plus suave, plus vague ; quoiqu'il fût séparé d'elle, il ne l'avait pas quittée, il était là, et les murailles de la maison semblaient garder son ombre.⁷⁾

エンマはレオンとの最初の関係で彼と別れたことを悔やみます。下線部に注目しましょう。まず、「影」＝ombreという語が現れていることが確認できます。影のテーマ系ですね。ただ、ここにはその起源的実体であるレオンはいません。起源的実体とその影^{ダブル}は分身はほとんど切り離されているといってよい。面白いのは、ここでは壁がまるでスクリーンのようになってレオンの影を映し出しているかのように描かれていることです。投光ならぬ、字義通りの投影です。一見すると、エンマにとって影のレオンは起源的実体であるレオンの代理であるように書かれています。しかし、「レオンは彼女と別れてはいても、彼女のもとを去ったわけではなくそこにいた」という文言を読むと、もしかするとエンマが、起源的実体であるレオンよりも強くその存在を感じていのではないかとさえ疑ってしまいます。それほど起源的実体よりも影^{ダブル}＝分身の方にエンマは反応しているのです。

起源的実体よりも、その分身^{ダブル}の方に反応してしまうのはなにもエンマにかぎったことではありません。レオンもエンマを起源的実体としてよりも「まず」（その時間的な先行性は、さき

ほどのprécéderという海の空間的前性として暗示された非肉体的時間的先行性と共通しています）その分身^{ダブル}として把握します。

32. ところへ、敷石の上に絹ずれの音、帽子の縁、黒ケープ……彼女だ！ レオンは立ち上がって彼女の方へ走り寄った。
Mais un froufrou de soie sur les dalles, la bordure d'un chapeau, un camail noir... C'était elle ! Léon se leva, courut à sa rencontre.⁸⁾

今度はエンマとレオンの二度目の恋愛関係です。レオンとエンマはルアンの大聖堂で逢引きの待ち合わせをします。レオンは今かいまかとエンマを待っている。するとそこにエンマがやって来る。面白いのは、視覚よりも起源との距離がはるかに大きく取れる「絹ずれの音」という聴覚的^{ダブル}分身で、まず、エンマという起源的実体の来訪を告げているところです。そしてその次に来るのが帽子の「縁」。帽全体ではなくてその先触れの「縁」の部分だけを描写するところが、先ほど指摘した前味 (avant-goût) に似ています。そして最後にエンマの肉体に最も近い（しかし、それでもまだ本体＝肉体そのものとはいえない）黒ケープが描写される。「彼女だ！」と起源的実体へ言及がなされるのは、先行する分身^{ダブル}の描写がすべて終わってからのことです。ここでも起源的実体よりも、その分身にたいする^{ダブル}敏感さが勝っていることが感得できるのではないのでしょうか？

この分身^{ダブル}がいかに強い力をもっているか。それが次の条からも伺えます。

33. フェリシテは今では奥さんの着物を身につけていた。もっとも全部ではなかった。それはシャルルが、そのうちの幾枚かを取っておいて、化粧室に閉じこもっては眺めるからであった。フェリシテは背格好がエンマと同じくらいなので、シャルルはフェリシテをうしろから見る

と、よく錯覚^{さっかく}にとらわれて叫ぶのだった。

「おお！ そのまま！ そのまま！」

Félicité portait maintenant les robes de Madame ; non pas toutes, car il en avait gardé quelques-unes, et il allait les voir dans son cabinet de toilette, ou il s'enfermait ; elle était à peu près de sa taille ; souvent Charles, en l'apercevant par derrière, était saisi d'une illusion et répétait :

《 Oh ! reste ! reste ! 》⁹⁾

エンマが死んで埋葬された後の場面。エンマの服の一部はシャルルが取っておいて、トイレに閉じこもって眺めるとあります。トイレなんかに閉じこもって、シャルルはいったいなにをしているのでしょうか。シャルルにはかなり病膏膏に入ったフェティシズム、固有の意味でのフェティシズムを想定しなければならないようです。もっとも、すでに失われたエンマという起源的実体（抹消された起源的実体、あるいは無限の彼方に遠のいた起源的実体ともいえるでしょうか）の分身である服を愛玩する姿は、『ボヴァリー夫人』というテキストの最も純粋な形象であるような気がします。このエンマの分身^{ダブル}たる服をお手伝いのフェリシテが着ると、シャルルにはフェリシテがエンマのように見える。まるでアイデンティティーが服という分身^{ダブル}からやってきているかのように、この分身は大きな力（規定性）をもっているわけです。鏡のなかの分身^{ダブル}が大きな力をもっていたように。起源的実体とその分身^{ダブル}とは、むしろ後者にこそ大きな力が存在するといいたくなるほどです。

ここで服という分身^{ダブル}を考えてみましょう。エンマが服を着ていれば、服がエンマの分身になります。ところで、この分身^{ダブル}たる服は、エンマを取り巻く一種の〈環境〉だということはできないのでしょうか？ 服は肉体をぴったりと包んでいます、それでもエンマという起源的実体そのものではない。エンマを取り巻いている。

つまり一種の〈環境〉です。

しかし、本人が着ているかざり起原的実体に密着している服とは違って（もちろん本人が死んでしまえば、服とて起原的実体化からは切り離されるのですが）、起原的実体から発する光は反射光によって、影はその反対に光の欠如によって、匂いや汗は体から発された粒子の蒸発によって、声や音は空気^{ダブル}を伝播する波動によって、起原的実体の分身^{ダブル}を周囲に広げてゆくにつれてこの〈環境〉は周囲へと広がってゆきます。隣接性が分身^{ダブル}を保証し、起原的実体の周囲に広がる〈環境〉が分身^{ダブル}となるわけです（フェティシズムは隣接性によって保障されている、ということを思いだしておきましょう）。こうして『ボヴァリー夫人』には服よりもいっそう周囲に広がった〈環境〉が起原的実体の分身として人を魅了することがあるのです。

34. 「しかし、たとい今日までお訪ねはしなくても」と彼はつづけて、「たといお目にかかれなくても、私はあなたを取り巻いているものを眺めあかしました。夜は夜ごと、私は床を離れてここまでまいりました。あなたのお家を、月の光にかがやく屋根を眺めました。あなたの窓辺に揺れる庭の木々や、窓ガラスをとおして闇のなかにかがやく小さなランプを、うすら明かりを眺めました（…）」

《 Mais, si je ne suis pas venu, continuait-il, si je n'ai pu vous voir, ah ! du moins j'ai bien contemplé ce qui vous entoure. La nuit, toutes les nuits, je me relevais, j'arrivais jusqu'ici, je regardais votre maison, le toit qui brillait sous la lune, les arbres du jardin qui se balançaient à votre fenêtre, et une petite lampe, une lueur, qui brillait à travers les carreaux, dans l'ombre(…)》¹⁰⁾

エンマを口説くロドルフの文句です。例によって月の光、窓、ランプの光、陰が登場して

います。エンマを取り巻くものすべてがロドルフにとって魅力になっている（事の真偽はともかく、ロドルフは少なくともそう発言しています）。この「取り巻くもの」、つまり〈環境〉はエンマの着るかなり緩い服だとは考えられないでしょうか？ 密着の程度に差はあっても、服も〈環境〉もいずれもがエンマを「取り巻く」ものだからです。〈環境〉は隣接性に基づいて起原的実体のなにがしかが投影されものとして、一見すると、起源の不在や欠如を補うもののように描かれています。上の引用ではロドルフは、エンマという起原的実体に会えないという事態（起原的実体の欠如）を埋め合わせるかのように、つまり次善の策であるかのように彼女の周囲すなわち〈環境〉を徘徊しています。しかしこれはテキストの表面上のロジックにすぎません。これまでも見てきたように、起原的実体ではなくその分身^{ダブル}に魅入られたテキストにおいてはむしろこの〈環境〉こそ決定的な力をもっているのです。ロドルフは、実は、エンマという起原的実体ではなくそれを取り巻く〈環境〉にこそ魅了されている。起原的実体とそれを取り巻く〈環境〉との力関係が逆転しているといったらよいでしょうか。少なくとも起原的実体が意味や価値や魅力をもつためにはこの〈環境〉こそが重要であり、場合によっては不可欠なのです。次の引用を読んでみましょう。

35. 教会堂はさながら巨大な部屋のように、彼女のまわりにしつらえられている。円天井は彼女の恋の告白を聞くために傾き、ステンド・グラスは彼女の顔を照らすためにかがやき、香炉は、立ちのぼる香煙のなかには彼女が天使のように出現するために燃えようとしている。

L'église, comme un boudoir gigantesque, se disposait autour d'elle ; les voûtes s'inclinaient pour recueillir dans l'ombre de la confession de son amour ; les vitraux resplendissaient pour illuminer son visage, et les encensoirs allaient

brûler pour qu'elle apparût comme un ange, dans la fumée des parfums.¹¹⁾

再びレオンがエンマを待つルアンの大聖堂内の描写です。香煙，光，陰といったお馴染みの要素があらわれています。そればかりか，エンマが「天使のように出現する」というところにはapparitionの動詞形であるaparaitreまで顔を見せている。つまりエンマの登場を，天使のごとく神々しい「出現」にするための〈環境〉がここには揃っているわけです。この〈環境〉があって始めて，エンマはレオンの恋人としての意味をもちます。ここでも，起源の実体自体の意味や価値を担保しているのは，起原の実体そのものではなく，その〈環境〉であることが明らかでしょう。主役であるエンマはこの〈環境〉のむしろ反映にすぎません。そのそもそも恋自体が，こうした〈環境〉と切り離すことができないことを，次の引用では話者自身が述べています。

36. ちょうどインドの植物のように，恋愛にもまたあらかじめ用意された土地と特殊の気温が必要なのではあるまいか。月下のため息も長い抱擁も，捨てられた人の手につたう涙も，すべての肉の興奮も恋の悩みも，それゆえ，のどかな御殿の露台や，分厚いじゅうたんを敷き，花咲きみだれた盆栽台を置き，ベッドを上段の間におさめた絹のカーテンの閨房や，また宝石のかがやき，召使の制服についている飾緒のきらめきと切りはなして考えることはできなかつた。

Ne fallait-il pas à l'amour, comme aux plantes indiennes, des terrains préparés, une température particulière ? Les soupîres au clair de lune et les longues étreintes, les larmes qui coulent sur les mains qu'on abandonne, toutes les fièvres de la chair et les langueurs de la tendresse ne se séparaient donc pas

du balcon des grands châteaux qui sont pleins de loisirs, d'un boudoir à stores de soie avec un tapis bien épais, des jardinières remplies, un lit monté sur une estrade, ni du scintillement des pierres précieuses et des aiguillettes de la livrée.¹²⁾

恋は，恋という起源の実体（そんなものがある話ですが）だけで成立しているのではなく，恋が置かれることになる適切な〈環境〉（「用意された土地と特殊の気温」）とは「切り離して考えること」ができない，と言っているのです。「用意された土地と特殊の気温」という表現は，引用30の「熱帯の浜辺」や「その国のけだるさ」という表現を思い起こさせませんか？ 恋の価値を決めるのは恋そのものではなく，恋を囲繞する場所，恋が置かれる〈環境〉にある。とすれば，恋を起源の実体とするなら，起原の実体よりもそれを取り巻く〈環境〉にこそなにかをもたらし力があるということにならないでしょうか？ 起源の実体を反映する鏡のなかの〈分身〉にこそ，なにか（意味，価値，認識，出来事など）をもたらし力があつたことと同じ事態が語られていることにお気づきになると思います。起源の実体とそれを取り巻く〈環境〉との立場の逆転とでもいったらよいのでしょうか。それが話者のふと漏らす次のような何気ない文言にも見事に現れています。

37. 勲章も馬車もある名医の客間で，レースをまとったバリ女のそばへ出ては，一介の書記に過ぎないレオンは，さすが子供のようにふるえもしたろう。しかし，このルアンの船着場で，こんなやぶ医者^{げんわく}の細君が相手なら，向こうを眩惑させるだけの自信は待ち合わせているので悠々と^{ゆうゆう}していた，度胸のあるなしは度胸をすえる場所次第である。

Auprès d'une Parisienne en dentelles, dans le salon de quelque docteur

illustre, personnage à décorations et à voiture, le pauvre clerc, sans doute, eût tremblé comme un enfant ; mais ici, à Rouen, sur le port, devant la femme de ce petit médecin, il se sentait à l'aise, sûr d'avance qu'il éblouirait. L'aplomb dépend des milieux où il se pose : ¹³⁾

パリの女なら肝も据わらなかったかもしれないが、地方都市のルアンで、しかも「やぶ医者」（シャルルは正式の医者ではありません）の妻なら余裕で誘惑できる。そういう認識でしょう。引用中下線部以前の条は、レオンの認識を自由間接話法で記述した文言と考えられます。テキストが乱発する恋のロマンチックな紋切型と比べてなんとまあ非ロマンチックで現実的な「せこい」認識でしょうか。フロベールはこの落差を狙っていたのではないかとさえ思います。ともあれ、興味深いのは下線部です。「度胸のあるなしは度胸をすえる場所次第である」とあります。この文を誰が発しているのはだれか？ どうも判然としません。レオンの可能性も否定はできませんが、そこまでレオンが自らを分析し、普遍的なワーディンで自らの行為を認識しようとしたとはちょっと考えづらい。語り手の発言か、起源不明の一般的な知恵の言葉（あるいはその偽装）ということころでしょうか。いずれにせよ、恋には恋に適した土地と気温（すなわち〈環境〉）があるのと同じように、度胸には度胸に適した〈環境〉があると喝破しているわけです。「場所」という言葉で和訳されたフランス語はmilieuxです。milieuとは「（人間を取り巻く）環境、周囲（の状況）」で、生物学のタームとしては「環境」や「媒質」や「培地」（milieu de cultureという形で）という訳語が与えられています（『小学館 ロベール仏和大辞典』）。まさしく恋や度胸にとって致命的な「媒質」であり「培地」であり「環境」なのです。つまり、恋や度胸を生かすも殺すもその「媒質」や「培地」次第ということになる。起源的実体よりも、その〈環境〉

がいかに致命的な重要性をもっているかがわかりになると思います。

こうして見てみると『ボヴァリー夫人』においては、意味や価値や重要性は、起源的実体それ自身からではなく、起源的実体の反映たる分身や、起源的実体が置かれ、起源的実体を包む〈環境〉からやってきていることが理解できると思います。この状況を、たとえばバルザックの登場人物をめぐる状況と比較してみたらおもしろいかもしれません。バルザックの登場人物を突き動かしているのは、登場人物の裡にある欲望です。欲望がエネルギーになり、エネルギーが物語を突き動かし、さまざまな表象を織りなしていきます。『谷間の百合』のモルソフ夫人の抑圧された欲望は火となって夫人の身体を焼きますし、『村の司祭』全体をヴェロニカの隠された欲望と罪の意識（つまり彼女の抑圧されたエネルギー）の表象として読むことができます。『あら皮』の護符あら皮はそうしたエネルギーの表象そのものです。登場人物の眼の輝きは、しばしばそうした抑え込まれたエネルギーのすさまじさを表現している。描写や物語や表象はこの欲望＝エネルギーと相関して存在しているのです。

ところが、たとえば『感情教育』のフレデリック・モローを見てみましょう。しばしばフレデリックの意欲のなさ、主体性の欠如が指摘されますが、それは、フレデリックの原理が、こうしたバルザック的な原理というかシステムとは無縁の、あるいはこれとまったく異なる原理やシステムからやってきているからです。フレデリックの行動は主体の欲望やエネルギーの駆動力に依っているのではなく、彼があるときたまたま置かれた〈環境〉の価値や意味に依存しているのです。あるいは他者に媒介された欲望からやってくると言い換えて良いかもしれませんが。フレデリックは他者の欲望を模倣しているにすぎません。『ボヴァリー夫人』においても同じです。欲望は他者からやってきます。ルネ・ジラルが『欲望の現象学』¹⁴⁾のなかで、フロベールの小説を含む文学作品について縷々

展開したシステムがまさにこれです。

エンマの埋葬後にシャルルが妻に覚えた欲望も、まさしくこの他者の欲望の模倣に他なりません。

38. 誰でもエンマを熱愛したに相違ないのだ、とシャルルは考えた。男という男はみんなエンマに恋こがれたに決まっている。そう思うとエンマがいっそう美しく思えた。そして彼はエンマにくるおいしい不断の欲望を感じた。それは彼の絶望に火の手をそえた。それは今となつては果たされぬ望みであるだけに、止まるところを知らなかった。

On avait dû, pensait-il, l'adorer. Tout les hommes, à coup sûr, l'avaient convoitée. Elle lui en parut plus belle; et il en conçut un désir permanent, furieux, qui enflammait son désespoir et qui n'avait pas de limites, parce qu'il était maintenant irréalisable.¹⁵⁾

シャルルは「男という男」が恋したエンマにこそ「くるおいしい」までの欲望を感じているのですが、それは全男性という媒介者から来ています。シャルルは他者の欲望を模倣しているにすぎない。ジラルルの「欲望の三角形」というシステムを典型的に示す事例です。わたしたちの文脈に引きつけてみるなら、シャルルは他者という鏡に映ったエンマの分身に欲望しているといって良いかもしれません。ここでも欲望は起源的実体であるところのエンマに直接向かうのではなく、この起源的実体の他者への投影にこそ向っているのですから。次の引用になると欲望をめぐる間接性、媒介性、反射性はさらに複雑さを増しています。

39. ロドルフはシャルルの向かい側にひじを突いて、しゃべりながら葉巻をかんでいた。シャルルは、かつてエンマが愛したこの男の顔を眼のあたりに見ながらさま

ざまな思いにふけていた。エンマの名残を見るような気がした。讚美の気持であつた。できるなら、自分がこの男になりたかつた。

Accoudé en face de lui, il mâchait son cigare tout en causant, et Charles se perdait en rêveries devant cette figure qu'elle avait aimée. Il lui semblait revoir quelque chose d'elle. C'était un émerveillement. Il aurait voulu être cet homme.¹⁶⁾

やはりエンマの埋葬後、シャルルは妻の「不倫」相手であるロドルフと向かい合わせになります。妻の不倫相手ですから、読む者は通常憎しみに満ちた敵対的な関係を想定します。ところが場面は見事にそれを脱臼させています。なにしろ寝取られ夫のシャルルは、間男ロドルフに羨望を感じるのですから。

表のロジックを追っておきましょう。シャルルはロドルフのなかに妻が愛した男を認めます。そして、妻から愛を得ることのできた男性として、シャルルはロドルフを妻と同じ評価の高みに置きます。そして、妻から愛されず妻の愛の高みに到達できなかったシャルル、したがって愛の評価においては低い地位に甘んじなければならなかったシャルルは、高い評価の位置についているロドルフを羨望し、讚美し、自分もできればその高みに昇りたかつたと思う。以上が表のロジックです。全男性が欲望するエンマ（引用38の「男という男はみんなエンマに恋こがれたに決まっている」）を獲得できたロドルフは全男性の頂点に立つ存在であり、シャルルに圧倒的な羨望と賛嘆の念を掻き立てるわけです。こうした高低を軸とする一元的評価システムから見ると、シャルルが欲望しているのはエンマという女性ではなく、男性としての社会的評価といってよいでしょう。

ところがこれと並行してもうひとつ別のロジックが働いています。下線部に注目してください。シャルルはロドルフに「エンマの名残を見るような気がした」と言っています。ロドル

フはエンマの部分的な「反映」であり「投影」なのです。つまりロドルフにはエンマの分身^{ダブル}が投映（投影）されている。もしこう言ってよければ、ロドルフはエンマ（の思い出）を映すスクリーンになっている。シャルルは「この男の顔を眼のあたりに見ながらさまざまな思いにふけていた」（Charles se perdait en rêveries devant cette figure qu'elle avait aimée）とあります。devant cette figure（この人物を前にして）というシャルルのロドルフにたいする対面的な位置関係に注目しましょう。この位置関係はシャルルやエンマが鏡に対してとった位置関係、エンマがヴォービエサールの館で窓に対してとった位置関係、エンマが農業共進会の場面で窓に対してとった位置関係とまったく同じです。ロドルフは、窓や鏡と同じく、シャルルがエンマの思い出を投映（投影）するスクリーンになっている。そのことが、対面的位置関係からも納得できます。

この場面をもう一段階複雑にしているのが波線部です。シャルルはロドルフにエンマの分身^{ダブル}を認めただけでは満足できず、「できるなら」という留保はつけているけれど、自分自身がロドルフになろうとしているのです。ロドルフはここにおいてエンマの分身^{ダブル}ですから、シャルルはエンマの分身^{ダブル}のそのまた反映^{ダブル}=分身^{ダブル}になろうとしていることになります。エンマの分身^{ダブル}としてのロドルフの分身としてのシャルル。エンマを反映するロドルフを反映するシャルル。ここに至って、三者のアイデンティティーは鏡のなかの鏡のような、カット・ガラスによる光の複雑な相互反射のような、ビリヤードの球の動きのような、幾重にも反射しあう反響音のようなふるまいを見せているわけです。こうしたシステムをいま仮に反射システムと名付ければ、『ボヴァリー夫人』においては反射システムがさまざまなレベルで働いていることに気づきます。

薬屋のオメーはこの反射システムに敏感です。

40. 「いえ、どうぞそこに。お上りくださるには及びません。女房はいますぐ下りに参ります。それまでにストーブにでもおあたりを……今晚は先生！（薬屋はこの「先生」という言葉を口にするのが大好きであった。「先生」という言葉に荘重な感じがあるとおもっていた。その言葉を他人に向っていうと、まるでその荘重さが幾分自分にも跳ね返ってくるような気がするのであった）（…）」

《 Non, restez, ce n'est pas la peine, elle va descendre. Chauffez-vous au poêle en attendant... Excusez-moi... Bonjour, docteur (car le pharmacien se plaisait beaucoup à prononcer ce mot *docteur*, comme si, en l'adressant à un autre, il eût fait rejaillir sur lui-même quelque chose de la pompe qu'il y trouvait)... (…))¹⁷⁾》

オメーは発された言葉が鏡に当たって自らに返ってくるような反射システムを備えていることを知っています。さすがに紋切型の人、オメーですね。紋切型とは、言葉やイデーの社会的な反復システム、反射システムであることはすでにふれました。また『ボヴァリー夫人』のテキスト全体が言葉や言語音の反復に憑りつかれていることも併せて指摘しました。紋切型の人オメーは、こうした反射システムと他者の言葉の反復（エコラリア）を通して自らの社会的評価を呼び寄せることを知っている。つまり、自らの言葉を他者のあいだに流通させ、自らが流通させた言葉を今度は他者に権威づけられた言葉として受け取ることによって、自らの社会的権威を獲得する術に精通しているわけです。

オメーのこの反射システムは同一性のシステム、つまり陽画が陽画として反復されるシステムでした。これを鏡の反射システムとでも言えるかもしれません。ところが反射システムにはもうひとつ、陽画を陰画として、あるいは陰画を陽画として反転させるシステムがあります。光／影の反射システムと言ったらよいでしょう

か。次の引用を見てみましょう。

41. 茫然とまどろむ意識のなかで彼女は夫への嫌悪を恋人へのあこがれ^{おっと}と思い誤り、
焼けつくような憎悪を愛情の暖かさ^{おっと}と取り
ちがえた。

Dans l'assoupissement de sa conscience, elle prit même les répugnances du mari pour des aspirations vers l'amant, les brûlures de la haine pour des réchauffements de la tendresse ;¹⁸⁾

レオンと別れたこと（一回目の関係における離別）を後悔するエンマの心中を説明した条です。エンマは「夫への嫌悪」を「恋人へのあこがれ」と、「焼けつくような憎悪」を「愛情の暖かさ」ととっています。ただ、邦訳は prendre A pour B（AをBと取る）という慣用句のprendreの単純過去pritを「思い誤り」「取りちがえた」としていて、エンマが最初からその間違いに気づいて反省しているかのよう^{おっと}に解釈していますが、文脈から、少なくともこの条の時点ではまだ誤りに気づいていないと考えられます。ともあれ、エンマはAにあたる「夫への嫌悪」と「焼けつくような憎悪」を、Bにあたる「恋人へのあこがれ」と「愛情の暖かさ」として取っている。つまり陽画を陰画の反転として取っているわけです。光強ければ影もまた濃い。一方の恋は他方の憎悪によってますますその色を濃くします。反射は反射でも、ここではAをAとして映す鏡のような同一性と違って、Aを非A（あるいはB）として映し出す反転した同一性とでもいうべき機制が働いているわけです。この機制は次の条にもはっきり表れています。

42. 彼女にはちがった場所で同じことが起ころうとは信じられなかった。そして今日まで生活した部分が不幸だったからには、これから送る生活はもっと幸福であるにちがいないと思った。

Elle ne croyait pas que les choses pussent se représenter les mêmes à des places différentes, et, puisque la portion vécue avait été mauvaise, sans doute ce qui restait à consommer serait meilleur.¹⁹⁾

ヨンヴィルに引っ越してきて間もないエンマは、レオンと知り合って、幸せになりそうな予感がします。エンマは退屈な生活から抜け出すために、それまで暮らしていたトストを抜け出してきたわけですから、新しい土地ヨンヴィルに期待するのは当然ですが、問題はそのロジックです。「違った場所で同じことが起ころうとは信じられなかった」という文言に注目しましょう。この発言の裏にあるのは、「違う〈環境〉は人に違う出来事（価値、意味...）をもたらす（はずだ）」というロジックなのです。つまり人が〈環境〉に影響を与えるのではなく、〈環境〉が人に影響を与える。出来事や価値や意味は人それ自身によって担保されるのではなく、人の置かれた〈環境〉によって担保されるという発想です。いま〈環境〉を鏡と置き換えてみると、引用23～26でみた構造とまったく同じであることに気づくと思います。鏡のテーマ系において出来事や価値や意味をもたらしたのは、人という起源的実体ではなく、鏡に映ったその分身^{ダブル}でした。

もうひとつ注目したいのが「今日まで生活した部分が不幸だったからには、これから送る生活はもっと幸福であるにちがいない」というロジックです。ここにはAを非Aとして映し出す反転した同一性とでもいうべき機制が働いています。「これまでは「影」だったから、これからは「光」になる（にちがいない）」という光／影の反射システム、あるいは陰画と陽画の反転システムです。

陽画－陽画の同一性の反射システムにせよ、陽画－陰画の反転した同一性の反射システムにせよ、反射が出来事や価値や意味をもたらすという点で違いはありません。そして起源的実体が置かれる〈環境〉こそが出来事や価値や意味

の担い手であることは、鏡のテーマ系と同じであることはもはやわかりいただけたことと思います。

結論

『ボヴァリー夫人』における光、影、埃、煙、霧、靄、雲、湯気、匂い、音、〈媒介〉のテーマ系を見てきました。これらのテーマ系が、それぞれの群を成しながらも、全体でひとつの大きなテーマ系を構成していることは、すでにおわかりいただけたことでしょう。起源的実体よりもその分身^{ダブル}への敏感さといったらいよいでしょうか。起源的実体からさまざまなレベルにおける分身が発され（それは光や影であったり、水蒸気や匂いであったり、鏡像であったり、音であったりするわけですが）、それを〈媒介〉する〈環境〉のなかに現れてくる、その現れにこそテキストは感応＝官能していることを感じ取っていただけたことと思います。そこには起源的実体の分身^{ダブル}という問題も発生します。そして、その身分規定から、分身には反射＝反復という問題が付きまとうことになります。フロベールの有名な「紋切型」の問題も、この反射＝反復というテーマ系と無縁ではないでしょう。また、起源的実体そのものよりも、その反映＝反射＝反復であるところのものが、出来事や価値や意味をもたらすという事態。それが、おそらくフロベールをもって嚆矢とするシミュラクル（擬態）の問題にもつながってゆくこともまた間違いのないのではないのでしょうか。

おわりに

私はフロベール研究者ではありません。その私が書いた本稿がフロベール研究においてすでに常識となっている視点を多分に含む虞のあることは「はじめに」に書いたとおりです²⁰⁾。フロベール研究においてどの点が古く、新しい点があるとするばどこなのか、原稿が完成した暁

にはフロベール研究者の畏友加藤雅郁（まさふみ）君にご一読願って、批判を仰ごうと考えていました。ところが本稿完成間近の2012年11月2日、なんとも悔しいことに、数日前病魔に斃れた加藤君が急逝してしまいました。すでに意識のなくなった加藤君の耳元で原稿完成間近の報告だけはすませましたが、実現しなかった畏友の批評とフロベール談議を今となっては想像するほかありません。本稿を加藤雅郁君の霊に捧げたいと思います。

『ボヴァリー夫人』講義 添付引用集

- ・この添付引用集は『『ボヴァリー夫人』講義（上）』（『杉本紀子退職記念誌』、2012年）、『『ボヴァリー夫人』講義（中）』（『流通情報学部紀要』、Vol.17, No.2, 流通経済大学流通情報学部、2012年）、『『ボヴァリー夫人』講義（下）』（本誌）に共通の添付引用集である。
- ・本文に引用しなかった引用箇所のみを集めている。
- ・アルファベットは各章に対応している。A = 光（第一章）、B = 影（第二章）、C = 埃、煙、霧、靄、雲、湯気（第三章）、D = 匂い（第四章）、E = 音（第五章）、F = 鏡（第六章）、G = 媒介（第七章）。
- ・引用文中には複数のテーマ系に属する語や表現が存在するばあいがある。そのばあい、主たるテーマ系に即して分類している。

A-1

「火斗^{じゅうのう}や火鋏^{ふいご}や鑷^{はがね}の口はどれも皆ばかに大きくて、みがいた鋼のように光^はっていた。一方、壁に沿っておびただしい台所道具が並び、その表面には、ガラス越しに射しこむ暁の色にまじって、暖炉の明るい炎がとりどりに照り映えていた。」（上、p.25）

La pelle, les pincettes et le bec du soufflet, tous de proportion colossale, brillaient comme de l'acier poli, tandis que le long des murs s'étendait une abondante batterie de cuisine,

où miroissait inégalement la flamme claire du foyer, jointe aux premières lueurs du soleil arrivant par les carreaux. (p.304)

A-2

「シャルルは彼女の爪の白さに驚いた。きらきら光って先が細く、ディエップの象牙細工よりもきれいにみがきがかかって、先尖りに切ってあった。」(上, p.26)

Charles fut surpris de la blancheur de ses ongles. Ils étaient brillants, fins du bout, plus nettoyés que les ivoires de Dieppe, et taillés en amande. (p.304)

A-3

「板のすき間をとおして、陽の光が細長い線^{すじ}をいくつも石畳の上に引いていた。その線は家具の角にくだけ、天井にふるえていた。蠅が食卓の上で、飲み捨てたコップを伝ってのぼり、底に残ったリング酒のなかにはまりこんでブンブンいっていた。煙突から差し込む陽の光が、暖炉^{ふたすす}の蓋の煤をビロードのように見せ、冷たい灰をほのあおく照らしていた。」(上, p.36)

Par les fentes du bois, le soleil allongeait sur les pavés de grandes raies minces, se brisaient à l'angle des meubles et tremblaient au plafond. Des mouches, sur la table, montaient le long des verres qui avaient servi, et bourdonnaient en se noyant au fond, dans le cidre resté. Le jour qui descendait par la cheminée, veloutant la suie de la plaque bleuissait un peu les cendres froides. (p.310-311)

A-4

朝はベッドで長枕に妻とそい寝しながら、ナイト・キャップの菌形の縁飾りになかば隠れた、金色にかがやく妻の頬のうぶ毛に、日かげの射すのを見詰めるのであった。(上, p.53)

Au lit, le matin, et côte à côte sur l'oreiller, il regardait la lumière du soleil passer parmi le duvet de ses joues blondes, que couvraient à

deux les pattes escaloppées de son bonnet. (p.321)

A-5

エンマの頭上、壁にかけたランプの反射鏡が、これら人の世のうつし絵を照らしていた。しずまり返った寝室のなか、まだ大通りを走っている帰りおくれた辻馬車の遠い響きとともに、絵は一枚一枚エンマの前を過ぎてゆくのであった。(上, p.61)

Et l'abat-jour du quinquet, accroché dans la muraille au-dessus de la tête d'Emma, éclairait tous ces tableaux du monde, qui passaient devant elle les uns après les autres dans le silence du dortoir et au bruit lointain de quelque fiacre attardé qui roulait encore sur les boulevards. (p.326)

A-6

しかしエンマは、自分の正しいと信じている理論どおりに恋を感じようとした。庭へ出て月の光を浴びながら、おぼえている限りの情熱的な詩句を朗吟^{ろうぎん}し、吐息しながら憂鬱なアダジオを夫に歌って聞かせた。(上, p.68)

Cependant, d'après les théories qu'elle croyait bonnes, elle voulut se donner de l'amour. Au claire de lune, dans le jardin, elle récitait tout ce qu'elle savait par cœur de rimes passionnées et lui chantait en soupirant des adagios mélancoliques ; (p.330)

A-7

並木道には、木の葉に照りかえされた緑の光が短い苔を照らし、苔は足もとでサクサクと鳴った。日は沈もうとしていた。空は枝のあいだにあかあかとかがやき、まっすぐに植えた同じような並木の幹は金色の背景から浮きだしている褐色の柱廊のように見えた。(上, p.71)

Dans l'avenue, un jour vert rabattu par le feuillage éclairait la mousse rase qui craquait doucement sous ses pieds. Le soleil se couchait ;

le ciel était rouge entre les branches, et les troncs pareils des arbres plantés en ligne droite semblaient une colonnade brune se détachant sur un fond d'or ; (p.332)

A-8

ふたりは日暮れがたに着いた。馬車を照らすために庭にあかりのつく頃であった。(上, p.72)

Ils arrivèrent à la nuit tombante, comme on commençait à allumer des lampions dans le parc, afin d'éclairer les voitures. (p.333)

A-9

ひとりの下僕が換気のために椅子に乗って窓ガラスを二枚たたきこわした。ガラスのわける音を聞いて、ボヴァリー夫人はふり向いた。すると、窓ガラスにくっついて、こちらを見詰めている百姓どもの顔が庭に見えた。たちまちベルトーの思い出が彼女の胸に浮かんできた。農場や、泥深い沼や、仕事着をつけて、りんごの下に立っている父親の姿が見えた。昔のように搾乳場のなかで、鉢の牛乳からクリームを指先ですくいとっている自分の姿が見えた。しかし現在のこのはげしい稲妻に照らされると、いままではっきりしていた過去の生活がごとく消え失うせて、本当にそんな生活をしたのかさえも疑われた。(上, p.81)

Un domestique monta sur une chaise et cassa deux vitres ; au bruit des éclats de verre, madame Bovary tourna la tête et aperçut dans le jardin, contre les carreaux, des faces de paysans qui regardaient. Alors le souvenir des Bertaux lui arriva. Elle revit la ferme, la mare bourbeuse, son père en blouse sous les pommiers, et elle se revit elle-même, comme autrefois, écrémant avec son doigt les terrines de lait dans la laiterie. Mais, aux fulgurations de l'heure présente, sa vie passée, si nette jusqu'alors, s'évanouissait tout entière, et elle doutait presque de l'avoir vécue. (p.338)

A-11

馬具部屋^{ゆか}の床は客間の床のように光って見えた。(上, p.85)

Le plancher de la sellerie luisait à l'œil comme le parquet d'un salon. (p.340)

A-12

しかし子爵を中心とする円はしだいに広がり、子爵の帯びている後光は顔を離れ、さらに遠く広がって、ほかのあまたの夢を照らした。

パリは大海原よりもまだ広く、朱色の雰囲気に包まれて彼女の眼にきらめいた。(上, p.90-91)

Mais au cercle dont il était le centre peu à peu s'élargit autour de lui, et cette auréole qu'il avait, s'écartant de sa figure, s'étala plus au loin, pour illuminer d'autres rêves.

Paris, plus vaste que l'Océan, miroissait donc aux yeux d'Emma dans une atmosphère vermeille. (p.344)

A-13

冬の寒さはきびしかった。窓ガラスには毎朝氷柱が張った。そこを^{つらら}通ってくる陽の光は、まるで磨^{すり}ガラスをとおしたように白っぽく、時によると一日じゅう変わらなかった。午後四時には、もうランプをつけねばならなかった。(上, p.99)

L'hiver fut froid. Les carreaux, chaque matin, étaient chargés de givre, et la lumière, blanchâtre à travers eux, comme par des verres dépolis, quelquefois ne variait pas de la journée. Dès quatre heures du soir, il fallait allumer la lampe. (p.349)

A-14

無地のステンドグラスから射し込む昼の日ざしは、壁と直角にならべた腰掛を斜めに照らす。(上, p.110)

Le grand jour, arrivant par les vitraux tout unis, éclaire obliquement les bancs rangés en

travers de la muraille, (p.356)

A-15

火は彼女の全身を照らし、ドレスの地や、白い肌^{むら}の斑のない毛孔や、ときどきしばたたく^{まぶた}瞼のなかにまで、どぎつい光を射し込ませた。半開きの扉から吹き込む風につれて、大きな赤い色が彼女をなめた。(上, p.122)

Le feu l'éclairait en entier, pénétrant d'une lumière crue la trame de sa robe, les pores égaux de sa peau blanche et même les paupières de ses yeux qu'elle clignait de temps à autre. Une grande couleur rouge passait sur elle selon le souffle du vent qui venait par la porte entr'ouverte. (p.363)

A-16

エンマは玄関へはいるなり、^{しつくい}漆喰の冷氣が、しめった布のように肩のうえに落ちかかるのを感じた。壁はぬりたてであった。木の階段が軋^{きし}んだ。二階の部屋には、窓掛のない窓から白っぽい光が射し込んでいた。木々の梢や、そのむこうに、なかば霧^{きり}の底に沈んでいる牧場などがかすかに見える。牧場は川の流れる形どおりに月下にもやをあげていた。(上, p.131-132)

Emma dès le vestibule, sentit tomber sur ses épaules, comme un linge humide, le froid du plâtre. Les murs étaient neufs, et les marches de bois craquèrent. Dans la chambre, au premier, un jour blanchâtre passait par les fenêtres sans rideaux. On entrevoyait des cimes d'arbres et, plus loin, la prairie, à demi noyée dans le brouillard, qui fumait au claire de lune, selon le cours de la rivière. (p.368)

A-16

真昼であった。家々は^{よろいど}鎧戸をしめ、スレートの屋根は青空のぎらぎらした陽の光にかがやいて、破風の頂から閃光を発しているように思われた。重苦しい風が吹いている。(上, p.141)

Il était midi ; les maisons avaient leurs

volets fermés, et les toits d'ardoises, qui reluisaient sous la lumière âpre du ciel bleu, semblaient à la crête de leur pignons faire pétiller des étincelles. (p.374)

A-16

日の光は、砕けてはつづく小さな青い水泡^{みなわ}を貫いていた。枝を払った古い柳が灰色の樹皮を水に映している。(上, p.146)

Le soleil traversait d'un rayon les petits globules bleus des ondes qui se succédaient en se crevant ; les vieux saules ébranchés miraient dans l'eau leur écorce grise ; (p.377)

A-17

爰炉の火は陽気な光を天井にふるわせている。(上, p.157-158)

La flamme de la cheminée faisait trember au plafond une clarté joyeuse ; (p.384)

A-18

ときどき、丈いっばいに広げたショールの絹地の上を、埃でも払うように爪ではじいた。するとショールは緑を帯びた夕ぐれの光に地の金箔^じのちらしを小さな星のようにきらめかせながら、かすかな音を立ててふるえるのであった。(上, p.159-160)

De temps à autre, comme pour en chasser la poussière, il donnait un coup d'ongle sur la soie des écharpes, dépliées dans toute leur longueur ; et elles frémissaient avec un bruit léger en faisant, à la lumière verdâtre du crépuscule, scintiller, comme de petites étoiles, les paillettes d'or de leur tissu. (p.385)

A-19

お堂の奥には灯火が燃えていた。ガラス器を吊り下げてなかに灯芯が入れてあった。その明かりは遠くから見ると、灯油のうえにほの白い斑点がふるえているように見えた。長い日ざしが内陣を横ざり両脇や隅々をいつそう暗く見せて

いた。(上, p.172)

Au fond de l'église, une lampe brûlait, c'est-à-dire une mèche de veilleuse dans un verre suspendu. Sa lumière, de loin, semblait une tache blanchâtre qui tremblait sur l'huile. Un long rayon de soleil traversait toute la nef et rendait plus sombres encore les bas-côtés et les angles. (p.392)

A-20

顔^{らしや}いっぱいに照りつける落日の光は、僧服の羅紗をほの白く見せていた。ひじのところがテカテカ光り、裾は切れていた。(上, p.173)

La lueur du soleil couchant qui frappait en plein son visage pâlisait le lasting de sa soutane, luisante sous les coudes, effiloquée par le bas. (p.393)

A-21

窓ガラスの白っぽい光は、波打ちながら静かに沈んで行った。いつもの場所にある家具調度は、なおさらじっと動かぬように見え、暗黒の大海に没するかのよう^にに、闇^にのなかに消えて行く。暖炉の火は絶えていた。時計は相変わらずカチカチ鳴っている。(上, p.178)

Le jour blanchâtre des carreaux s'abaissait doucement avec des ondulations. Les meubles à leur place semblaient devenus plus immobiles et se perdre dans l'ombre comme dans un océan ténébreux. La cheminée était éteinte, la pendule battait toujours. (p.395-396)

A-22

彼女は顎を引き額を突き出して顔をそむけた。光は大理石の上をすべるように眉の曲線まですべっていた。しかし彼女が地平の彼方になにを見ているのか、心の底になにをおもっているのか知る由もなかった。(上, p.186)

Elle se détourna, le menton baissé et le front en avant. La lumière y glissait comme sur un marbre, jusqu'à la courbe des sourcils, sans

que l'on pût savoir ce qu'Emma regardait à l'horizon ni ce qu'elle pensait au fond d'elle-même. (p.400)

A-23

ボヴァリー夫人は、庭沿いの窓を開いて雲行きを眺めていた。

雲は西の方、ルアンあたりに重畳^{ちようじよう}して、あわただしく黒いうずを巻き、そのうずのうしろからは、壁にかかげた戦利品の金箭^{きんせん}のように、さんさんたる陽光が射し出ていた。そして残りのうつろな空は磁器のように白っぽかった。そこへ、一陣の突風がおこってポプラの木々をたわめた。にわか雨が降り出した。雨は青葉の上にバラバラと音をたてる。やがてまた陽がさし、牝鶏がないた。雀はしっとりぬれた藪に羽ばたきし、砂の上の水たまりはアカシアの紅花を運んで流れ去った。(上, p.188)

Madame Bovary avait ouvert sa fenêtre sur le jardin, et elle regardait les nuages.

Ils d'amoncelaient au couchant, du côté de Rouen, et roulaient vite leurs volutes noires, d'où dépassaient par derrière les grandes lignes du soleil, comme les flèches d'or d'un trophée suspendu, tandis que le reste du ciel vide avait la blancheur d'une porcelaine. Mais une rafale de vent fit se courber les peupliers, et tout à coup la pluie tomba ; elle crépitait sur les feuilles vertes. Puis le soleil reparut, les poules chantèrent, des moineaux battaient des ailes dans les buissons humides, et les flaques d'eau sur le sable emportaient en s'écoulant les fleurs roses d'un acacia. (p.401)

A-24

おりからの快晴に、糊つけした頭巾や、金の十字架や、色の肩掛けは雪よりも白く見え、明るい日の光にきらめいて、フロックや青い上張り^{うわっぱ}の地味な単調さを、あたりに散らばるとりどりの色彩によって引き立てていた。(上, p.206)

et, par le beau temps qu'il faisait, les bonnets

empesés, les croix d'or et les fichus de couleur paraissaient plus blancs que neige, miroitaient au soleil clair, et relevaient de leur bigarrure éparpillée la sombre monotonie des redingotes et des bourgerons bleus. (p.411-412)

A-25

あまりに落着きはらった横顔なので、まるきり見当がつかなかった。葦の葉に似た薄色リボンのついているボンネットの楕円のなかに、その横顔はまともに日の光を受けてクッキリと浮いていた。（上, p.212）

Son profil était si calme, que l'on n'y devinait rien. Il se détachait en pleine lumière, dans l'ovale de sa capote qui avait des rubans pâles ressemblant à des feuilles de roseau. (p.415)

A-26

宵闇がおりてきた。横ざまに射す陽の光が枝間を縫ってエンマの眼にまばゆかった。まわりにはここかしこ、木の葉のなかや土のうえに、まるで蜂雀が飛びながらその羽根を散らしたように、光の斑点がふるえていた。（下, p.17）

Les ombres du soir descendaient ; le soleil horizontal, passant entre les branches, lui éblouissait les yeux. Ça et là, tout autour d'elle, dans les feuilles ou par terre, des taches lumineuses tremblaient, comme si des colibris, en volant, eussent éparpillé leurs plumes. (p.438)

A-27

窓辺に沿って掛けた黄色いカーテンが、どっしりとした金色の光を柔らかにとおしている。エンマは目をしばたたきながら手探りで進んだ。そのとき、髪に宿った露の玉がまるで黄玉の後光のように、顔を取りまいて光っていた。（下, p.22）

Les rideaux jaunes, le long des fenêtres, laissaient passer doucement une lourde lumière blonde. Emma tâtonnait en clignotant

des yeux, tandis que les gouttes de rosée suspendues à ses bandeaux faisaient comme une auréole de topaze tout autour de sa figure. (p.441)

A-28

彼は赤いガラスびんの光に照らされながら、台の前に立っていた。（下, p.26）

Il était debout devant le comptoir, éclairé par la lumière du bocal rouge, (p.443)

A-29

部屋の窓の下には蜜蜂の巣箱があった。ときどき蜜蜂が陽光のなかに飛びまわり、窓ガラスに突きたっては金の玉のように跳ね返った。（下, p.35-36）

Il y avait sous sa fenêtre une ruche à miel et quelquefois les abeilles, tournoyant dans la lumière, frappaient contre les carreaux comme des balles d'or rebondissantes. (p.449)

A-30

四月の陽ざしが棚にならべた磁器の上で玉虫色に光っていた。暖炉の火は燃えている。スリッパの下には敷物の柔らかみが感じられる。陽の光は明るく 空気は暖かい。彼女は娘が大声で笑うのを聞いた。（下, p.36）

Un rayon d'avril chatoyait sur les porcelaines de l'étagère; le feu brûlait; elle sentait sous ses pantoufles la douceur du tapis ; le jour était blanc, l'atmosphère tiède, et elle entendit son enfant qui poussait des éclats de rire. (p.449)

A-31

歩道の上に足音がした。シャルルは目をやった。すると、市場のはしに陽の光をいっぱい受けて、カニヴェ博士がうす絹のハンカチで顔をふいているところが降ろした鎧戸越しに見えた。（下, p.56）

Il se fit un bruit de pas sur le trottoir. Charles regarda ; et, à travers la jalousie

baissée, il aperçut au bord des halles, en plein soleil, le docteur Canivet qui s'essuyait le front avec son foulard. (p.461)

A-32

シャルルは夜中に帰ってきたとき、彼女を起こす勇気がなかった。磁器製の豆ランプはゆらめく投影をまるく天井に描き、小さい揺籃に引かれたカーテンは白い小屋のようにベッドのそばの影にもりあがっていた。(下, p.72)

Quand il rentrait au milieu de la nuit, il n'osait pas la réveiller. La veilleuse de porcelaine arrondissait au plafond une clarté tremblante, et les rideaux fermés du petit berceau faisaient comme une hutte blanche qui se bombait dans l'ombre, au bord du lit. (p.469)

A-33

月はまんまるく紫がかって、牧場の果ての地平線を離れようとしていた。月は白楊の枝のなかへすすとのぼってゆく、と、枝は穴のあいた黒幕のようになるところどころ月のおもてを隠すのであった。やがて月はこうこうとかがやき出て虚空を照らした。月はそのとき歩みをゆるめ、川面に大きな影を落とした。影は無数の星となって散った。(下, p.78)

La lune, toute ronde et couleur de pourpre, se levait à ras de terre, au fond de la prairie. Elle montait vite entre les branches des peupliers, qui la cachaient de place en place, comme un rideau noir, troué. Puis elle parut, élégante de blancheur, dans le ciel vide qu'elle éclairait ; et alors, se ralentissant, elle laissa tomber sur la rivière une grande tache, qui faisait une infinité d'étoiles ; (p.472)

A-34

屋根のスレートからは、むっとするようないきれがまっすぐにおりてきて、こめかみを締めつけ、息苦しくした。彼女はしめた明かり窓のところまでやっとたどりついて門を抜いた。ま

ぶしい光がさっと流れ込んだ。(下, p.91)

Les ardoises laissaient tomber d'aplomb une chaleur lourde, qui lui serrait les tempes et l'étouffait ; elle se traîna jusqu'à la mansarde close, dont elle tira le verrou, et la lumière éblouissante jaillit d'un bond. (p.479)

A-35

そこでエンマは、稲妻のように夕闇を切るランプの灯影で、彼の姿をそれと認めたのであった。(下, p.95)

et Emma l'avait reconnu à la lueur des lanternes qui coupaient comme un éclair le crépuscule. (p.481)

A-36

そうした時、市場の屋根の雪は、じっと動かぬ白い反射を部屋へ投げた。(下, p.103)

Cependant, la neige sur le toit des halles jetait dans la chambre un reflet blanc, immobile ; (p.485)

A-37

「ああ、ほくはどんなにあの仙人掌のことを考えたでしょう！ 夏の朝、陽の光が鏡戸に射すころになると、僕はよく昔のように、あの仙人掌を思い浮かべるのでした…」(下, p.139)

—Ah ! que j'ai pensé à eux, savez-vous ? Souvent je les revoyais comme autrefois, quand, par les matins d'été, le soleil frappait sur les jalousies... (p.506)

A-37

晴れた夏の朝であった。鍔屋の店には銀の器がかがやいていた。陽の光は大寺院の上に斜めにさして灰色の石の割れ目にキラキラ光る。(下, p.147)

C'était par un beau matin d'été. Des argenteries reluisaient aux boutiques des orfèvres, et la lumière qui arrivait obliquement sur la cathédrale posait des miroitements à la

cassure des pierre grises ; (p.509)

A-38

外の明るい陽^ひざしは、開いた三つの扉から、ふ
とい三筋の光となって堂のなかへ延びていた。
(下, p.148)

Le grand jour du dehors s'allongeait dans
l'église en trois rayons énormes, par les trois
portails ouverts. (p.510)

A-39

一度、真昼ごろ、野原のまんなかで、古ぼけ
た銀のランプに陽^ひの光がはげしく射すところお
い、小さな黄色の布のカーテンの下から、あら
わな手が一つ出て、千切れた紙ぎれを投げた。
(下, p.157)

Une fois, au milieu du jour, en pleine
campagne au moment où le soleil dardait le
plus fort contre les vieilles lanternes argentées,
une main nue passa sous les petits rideaux de
toile jaune et jeta des déchirures de papier,
(p.515)

A-40

彼女は舟の仕切りによりかかって、男と向い
合っていた。月の光が開いた戸の間から射しこ
んでいた。黒衣の襷は扇形に広がって、彼女を
すんなりと丈高く見せていた。彼女は顔をあげ、
両手をあわせ、眼を空のかなたに向けていた。
ときたま柳の影が彼女の姿をすっかりおおい隠
すかと思うと、彼女はまたたちまち幻のよう
に、月光の中に現れる。(下, p.177)

Elle se tenait en face, appuyée contre la
cloison de la chaloupe, où la lune entrait par un
des volets ouverts. Sa robe noire, dont les
draperies s'élargissaient en éventail,
l'amincissait, la rendait plus grande. Elle avait
la tête levée, les mains jointes, et les deux yeux
vers le ciel. Parfois l'ombre des saules la cachait
en entier, puis elle réapparaissait tout à coup,
comme une vision, dans la lumière de la lune.

(p.525-526)

A-41

ちょうど折からのあらしなので、二人は稲光^{いなびかり}に
照らされながら, 傘のなかで語り合った。
(下, p.180)

Il faisait de l'orage, et ils causaient sous un
parapluie, à la lueur des éclairs. (p.527)

A-42

まぼろしの男は青白い国に住んでいた。そこ
には花の息吹の下に月の光を浴びながら、絹の縄
梯子が露台にゆれている。(下, p.235)

Il habitait la contrée bleuâtre où les échelles
de soie se balancent à des balcons, sous le
souffle des fleurs, dans la clarté de la lune.
(p.556)

A-43

うららかな天気である。太陽が真白な空にか
がやいて, いったいに明るくギラギラする三月
の日和であった。(下, p.248)

Il faisait beau ; c'était un de ces jours du
mois de mars clairs et âpres, où le soleil reluit
dans un ciel tout blanc. (p.563)

A-44

澄んだ空には、ところまんだらに、ばら色の雲
がかかっていた。青みを帯びたうす明りが、
菖蒲^{しょうぶ}でおおわれたわら屋の上に反射している。
(下, p.317)

Le ciel pur était tacheté de nuages roses ; des
lumignons bleuâtres se rabattaient sur les
chaumières couvertes d'iris; (p.600)

A-45

草原に沈む入日の斜光に照らされて、村じゅう
の窓があかあかとかがやいていた。(下, p.320)
Les fenêtres du village étaient tout en feu sous
les rayons obliques du soleil qui se couchait
dans la parairie. (p.602)

A-46

その翌日、シャルルは青葉棚のベンチへ行って腰をかけた。日の光は格子の間から射し込んでいた。ブドウの葉は砂の上に影を描いている。素馨の花はかおっていた。空は青かった。はんみょうが咲き誇った百合のまわりに羽音をたてている。(下, p.336)

Le lendemain, Charles alla s'asseoir sur le banc, dans la tonnelle. Des jours passaient par le treillis ; les feuilles de vigne dessinaient leurs ombres sur le sable, le jasmin embaumait, le ciel était bleu, des cantharidès bourdonnaient autour des lis en fleur, (p.610)

B-1

「奥さんは、ときどき本のなかで、なんとなくそう考えていたことや、遠い昔から帰ってきたようなかすかな影に出会ったり、ご自分の心にある本当に微妙な感情がそっくりそのまま表現されているのにお出会いになったことはありませんか」(上, p.129)

—Vous est-il arrivé parfois, repris Léon, de rencontrer dans un livre une idée vague que l'on a eue, quelque image obscurcie qui revient de loin, et comme l'exposition entière de votre sentiment le plus délié ? (p.367)

B-2

影のとばりが木の葉の茂みにみちていた。(…) 古い日の愛情がそばを流れる川のように豊かに、ひめやかに、また山梅花が運んでくる柔らかな香りのように、二人のところに帰ってきた。そして草葉の上にのびてじっと動かぬ柳の影よりも、もっと長い、もっと淋しい影を二人の追憶のうちに投げるのであった。(下, p.78-79)

des nappes d'ombre emplissaient les feuillages. (...) La tendresse des anciens jours leur revenait au cœur, abondante et silencieuse comme la rivière qui coulait, avec autant de

mollesse qu'en apportait le parfum des seringas, et projetait dans leurs souvenirs des ombres plus démesurées et plus mélancoliques que celles des saules immobiles qui s'allongeaient sur l'herbe. (p.472-473)

B-3

何分かたってロドルフは立ち止った。白衣のエンマが亡霊のように次第次第に闇のなかに消えてゆくを見ると、彼ははげしい動悸に襲われた。そして倒れないように木立によりかかった。(下, p.81)

Au bout de quelques minutes, Rodolphe s'arrêta ; et, quand il la vit avec son vêtement blanc peu à peu s'évanouir dans l'ombre comme un fantôme, il fut pris d'un tel battement de cœur, qu'il s'appuya contre un arbre pour ne pas tomber. (p.474)

B-4

彼は女の家を徘徊した。料理場に明りが一つついている。カーテンの向こうに、もしやあの人の影はとうかがった。が、気配はなかった。(下, p.179)

Il alla rôder autour de sa maison. Une lumière brillait dans la cuisine. Il guetta son ombre derrière les rideaux. Rien ne parut. (p.527)

C-1

棟々に沿って大きな堆肥がつらなり、そこから湯気がのぼっていた。その上には、牝鶏や七面鳥にまじって、コー地方の養禽場にしてはぜいたくなくじゃくが五、六羽、餌をあさっていた。(上, p.24)

Le long des bâtiments s'étendait un large fumier, de la buée s'en élevait, et, parmi les poules et les dindons, picoraient dessus cinq ou six paons, luxe des basses-cours cauchoises. (p.303)

C-2

ドアの下から吹き込む隙間風が、石畳の上にかすかに埃を走らせた。シャルルは埃のはうのを眺めていた。（上、p.37）

L'air passant par le dessous de la porte, poussait un peu de poussière sur les dalles ; il la regardait se trainer, (p.311)

C-3

さてえんえんとはてもなく土埃の帯をひいている街道の上、（上、p.54）

Et alors, sur la grande route qui étendait sans en finir son ruban de poussière, (p.321)

C-4

伊勢^{いせ}びの赤い足は皿からはみ出し、^{すか}透し細工の籠に入れた大きな果物は、飾り苔の上にうずたかく段をなし、うずらは羽根つきのまま湯気を立てていた。（上、p.75）

Les pattes rouges des homards dépassaient les plats ; de gros fruits dans des corbeilles à jour s'étagaient sur la mousse ; les cailles avaient leurs plumes, des fumées montaient ; (p.335)

C-6

シャルルは唇をとがらして葉巻を吸いだした。しじゅうペッペッと唾を吐き、煙を吹くごとに後じさりしながら。（上、p.87）

Charles se mit à fumer. Il fumait en avançant les lèvres, crachant à toute minute, se reculant à chaque bouffée. (p.342)

C-7

難破した水夫のように、彼女は生活の孤独の上に絶望の眼をやり、はるか水平線の濃霧の中に白帆の影を探し求めた。（上、p.97）

Comme les matelots en détresse, elle promenait sur la solitude de sa vie des yeux désespérés, cherchant au loin quelque voile blanche dans les brumes de l'horizon. (p.348)

C-8

ルオーじいさんは部屋でたばこを吸い、暖炉の薪架に唾をはき、耕作のこと、犢や牝牛や家禽のこと、村会のことを論じ立てた。（上、p.103）

Il fuma dans la chambre, cracha sur les chenets, causa culture, veaux, vaches, volailles et conseil municipal ; (p.352)

C-9

エンマはオメーに腕を貸し、その肩にちよつともたれるようにして、遙か霧のなかにまばゆい青白い光を発している太陽の円盤を眺めた。（上、p.156）

Emma, qui lui donnait le bras, s'appuyait un peu sur son épaule, et elle regardait le disque du soleil irradiant au loin, dans la brume, sa pâleur éblouissante ; (p.383)

C-10

夕靄は葉の落ちたポプラの木の^ま間を過ぎ、木の輪郭を、枝に薄ものを掛けたよりもなお淡く、すき通った紫色にくまどてっていた。（上、p.170）

La vapeur du soir passait entre les peupliers sans feuilles, estompant leurs contours d'une teinte violette, plus pâle et plus transparente qu'une gaze subtile arrêtée sur leurs branchages. (p.391)

C-11

日曜日のミサの折、頭をあげると、縷々として立ちのぼるほの青い香煙のなかに、やさしいマリアの顔が見えた。（上、p.171）

le dimanche, à la messe, quand elle relevait la tête, elle apercevait le doux visage de la Vierge, parmi les tourbillons bleuâtres de l'encens qui montait. (p.391)

C-12

エンマはそんなことをいわれるのはこれが最初であった。エンマのうぬぼれは、蒸風呂の中

にくつろぐ人のようにこの言葉の熱気をうけて
柔らかにのびきった。(下, p.7)

C'était la première fois qu'Emma s'étendait
dire ces choses ; et son orgueil, comme quelqu'un
qui se délasse dans une étuve, s'étirait
mollement et tout entier à la chaleur de ce
langage. (p.433)

C-13

見る人のからだにしみとおるような霊妙なある
ものが、彼女の服の襷ひだや土まずの曲線からさ
え発散した。(下, p.72)

quelque chose de subtil qui vous pénétrait se
dégageait même de draperies de sa robe et de
la cambrure de son pied. (p.469)

C-14

まるで自分の存在が神のみもとへと昇って行
き、ちょうどくんこう薫香に火を点ずれば煙となって消
え失せるように、自分の存在もまた神の愛に没
入するのではないかと思われた。(下, p.104)

il lui sembla que son être, montant vers Dieu,
allait s'anéantir dans cet amour comme un
encens allumé qui se dissipe en vapeur. (p.486)

C-15

寝間とばりの帳は彼女のまわりに雲のように柔らかく
ふくらみ、たんす簞笥の上にとまった二本のろうそく
の光は、まばゆい後光のようにも見えた。
(下, p.104-105)

Les rideaux de son alcôve se gonflaient
mollement, autour d'elle, en facon de nuées, et les
rayons des deux cierges brûlant sur la commode
lui parurent être de gloires éblouissantes. (p.486)

C-16

彼女の顔は、風がサッと雲を吹き払うときの
あの空のようであった。暗く垂れこめていた哀
愁の雲が青い眼から消え失せたように思われ
た。顔じゅうがかがやいた。(下, p.139)

Ce fut comme le ciel, quand un coup de vent

chasse les nuages. L'amas de pensées tristes
qui les assombrissaient parut se retirer de ses
yeux bleus ; tout son visage rayonna. (p.505)

C-17

お堂のなかで二時間近くも石のように動かずに
いた恋ごろが、今度は煙のように消えてゆき
そうな気がしたのである。(下, p.154)

car il lui semblait que son amour, qui, depuis
deux heures bientôt, s'était immobilisé dans
l'église, comme les pierres, allait maintenant
s'évaporer tel qu'une fumée. (p.513)

C-18

町の角々にはばら色をした物が小さく積み上げ
てあり、そこから湯気が立ちのぼっていた。
ちょうどジャムを作る季節で、ヨンヴィルでは
どの家でも同じ日に一年分のジャムをつくって
おくのである。(下, p.159)

Au coin des rues, il y avait de petits tas roses
qui fumait à l'air, car c'était le moment des
confitures, et tout le monde, à Yonville,
confectionnait la provision le même jour.
(p.516)

C-19

チャン瀝青を煮る煙が木の間をもれ、かわも河面には大きな
油のしずくが真紅の陽の光を受けて、フロレン
スの青銅板がただよっているように、とりどりに
波打つのが見えていた。(下, p.176)

La fumée du goudron s'échappait d'entre les
arbres, et l'on voyait sur la rivière de larges
gouttes grasses, ondulant inégalement sous la
couleur pourpre du soleil, comme des plaques
de bronze florentin, qui flottaient. (p.524-525)

C-20

「おお！ 動かないで！ 口をきかない
で！ あたしをじっと見て！ あんたの眼か
ら, なんだか, 甘いものがくるのよ, あたし、
いい気持！」(下, p.191)

《 Oh ! ne bouge pas ! ne parle pas ! regarde-moi ! Il sort de tes yeux quelque chose de si doux, qui me fait tant de bien ! 》 (p.533)

C-21

道を曲がるごとに町の灯がだんだんとよく見えてくる。それはごっちゃになった家々の上に、大きな光の霧を立てていた。(下, p.192-193)

A chaque tournant, on apercevait de plus en plus tous les éclairages de la ville qui faisait une large vapeur lumineuse au-dessus des maisons confondues. (p.534)

C-22

そして、群衆の無数の顔も、仮面のカドリーユもシャンデリアも夜食もあの女たちも、すべては吹きやられる霧のように次第に消えて行った。(下, p.237)

et peu à peu les figures de la foule, les masques, les quadrilles, les lustres, le souper, ces femmes, tout disparaissait comme des brumes emportées. (p.557-558)

C-23

食べる手は休めずに彼はすっかりエンマの方を向いていたので、膝がしらがエンマの靴に軽くふれた。靴底はストーブに押しつけられて曲がり、さかんに湯気を立てていた。(下, p.256)

et, sans s'interrompre de manger, il s'était tourné vers elle complètement, si bien qu'il frôlait du genou sa bottine, dont la semelle se recouvrait tout en fumant sur le poêle. (p.567)

C-24

壁のはげたところや、くっついて煙っている二本の薪や、頭の上の梁の割れ目をはっているひよろ長いくもを眺めていた。(下, p.263-264)
Elle contemplait les écaillures de la muraille, deux tisons fumant bout à bout, et une longue araignée qui marchait au-dessus de sa tête

dans la fente de la poutrelle. (p.571)

C-25

エンマは霧のなかに遠くかがやく人家の火を認めた。(下, p.275)

Elle reconnut les lumières des maisons, qui rayonnaient de loin dans le brouillard. (p.577-578)

C-26

波模様が、月光のように白い繻子のドレスの上にふるえていた。エンマはその下にかくれていた。シャルルには、エンマが彼女自身のそとへ広がり出て、まわりを取りまくもののなかへ、沈黙のなかへ、闇のなかへ、吹きすぎる風のなかへ、立ちのぼるしっとりとした香りのなかへまぎれこんで行くように思われた。(下, p.309)

Des moires frissonnaient sur la robe de satin, blanche comme un clair de lune. Emma disparaissait dessous ; et lui semblait que, s'épandant au dehors d'elle-même, elle se perdait confusément dans l'entourage des choses, dans le silence, dans la nuit, dans le vent qui passait, dans les senteurs humides qui montaient. (p.596)

D-1

彼は鼻腔を開いてこころよい野の香りをかごととした。しかし彼のところまでは匂ってこなかった。(上, p.18)

Et il ouvrit les narines pour aspirer les bonnes odeurs de la campagne, qui ne venaient pas jusqu'à lui. (p.300)

D-2

窓と向かい合った背の高いかしのたんすから、いちはつ入りの香水やしめったシーツの匂いがした。(上, p.26)

On sentait une odeur d'iris et de draps humides

qui s'échappait de la haute armoire en bois de chêne faisant face à la fenêtre. (p.305)

D-3

エンマは祭壇の^{くんこう}薫香から、祝水盤のすがすがしさから、さては^け大ろうそくの光から立ちのぼる神秘的な^け気だるさに静かにまどろんだ。(上, p.56)

elle s'assoupit doucement à la langueur mystique qui s'exhale des parfums de l'autel, de la fraîcheur des bénitiers et du rayonnement des cierges. (p.323)

D-4

エンマは中へ入るなり、花の香や立派なテール掛けとナプキンの匂い、肉類の^{いさ}かおり、松露の香のいっしょになった、暖かい^{いさ}燐れに包まれるのを感じた。大燭台のろうそくは銀の皿おおいに^{いさ}灯影を伸ばし、蒸気に曇ったカット・グラスは、ほのかな光を投げ合っていた。(上, p.75)

Emma se sentit, en entrant, enveloppée par un air chaud, mélange du parfum des fleurs et du beau linge, du fumet des viandes et de l'odeur des truffes. Les bougies des candélabres allongeaient des flammes sur les cloches d'argent, les cristaux à facettes, couverts d'une buée mate, se renvoyaient des rayons pâles ; (p.335)

D-5

彼らは頭文字を大きく縫いとったハンカチで口もとをふいた。ハンカチからは甘い匂いがした。(上, p.80)

ils s'essuyaient les lèvres à des mouchoirs brodés d'un large chiffre, d'où sortait une odeur suave. (p.337)

D-6

彼女の思い出をよみがえらせようと彼はベッドの枕もとにある戸棚へ行ってランス名産のビ

スケットがはいっていた古い箱を取り出した。そのなかにいつも女たちからきた手紙をしまっておくことになっている。しめっぽい埃^{ほこり}の匂いと褪^あせたばらの香りが箱からもれた。(下, p.82-83)

Afin de ressaisir quelque chose d'elle, il alla chercher dans l'armoire, au chevet de son lit, une vieille boîte à biscuits de Reins où il enfermait d'habitude ses lettres de femmes, et il s'en échappa une odeur de poussière humide et de roses flétries. (p.475)

D-7

さてロドルフの思い出、それは彼女の心の底深く埋められていた。それは穴倉に納められた王様のミイラよりも、もっとおごそかにもっと静かに横たわっていた。香料をつめて在りし日のままに残されたこの熱烈な恋からは、ある一つの香りがもれてきた。それはあらゆるものを通して、エンマが住まおうと願っている清浄な雰囲気にしめやかな愛情をくゆらせた。(下, p.107)

Quant au souvenir de Rodolphe, elle l'avait descendu tout au fond de son cœur ; et il restait là, plus solennel et plus immobile qu'une momie de roi dans un souterrain. Une exhalaison s'échappait de ce grand amour embaumé et qui, passant à travers tout, parfumait de tendresse l'atmosphère d'immaculation où elle voulait vivre. (p.487-488)

D-8

しかし、やや下手の方へ行くと、涼かぜがひえびえと感じられ、脂やなめし革や油の匂いがした。それはシャレット通りからくる臭気であった。その通りには暗い大倉庫がたくさんあって、人夫がしじゅう樽をゴロゴロころがしている。(下, p.118)

Un peu plus bas, cependant, on était rafraîchi par un courant d'air glacial qui sentait le suif, le cuir et l'huile. C'était l'exhalaison de la rue

des Charrettes, pleine de grands magasins noirs où l'on roule des barriques. (p.494)

D-9

玄関へ入ると彼女はもうわくわくした。
(…) 廊下^{ほこり}の埃っぽい匂いを胸いっぱい^{こめて}に吸い込んだ。(下, p.118)

Un battement de cœur la prit dès le vestibule.(...) elle aspira de toute sa poitrine l'odeur poussièreuse des couloirs, (p.494)

D-10

ガスの臭いがひとびとの息に交じっていた。
扇の風は空気をいっそう重苦しくしていた。
(下, p.125)

L'odeur du gaz se mêlait aux haleines ; le vent des éventails rendait l'atmosphère plus étouffante. (p.498)

D-11

そして神の助けを得るために燦爛^{さんらん}たる聖櫃を見つめ、大花瓶のなかに咲いている白いジュリエンの香を吸い込み、堂内の静寂に耳を傾けた。しかしその静寂はただ心の乱れを増すばかりであった。(下, p.150)

et, pour attirer le secours divin, elle s'emplissait les yeux des splendeurs du tabernacles, elle aspirait le parfum des juliennes blanches épanouies dans les grands vases, et prêtait l'oreille au silence de l'église, qui ne faisait qu'accroître le tumulte de son cœur. (p.511)

D-12

前掛けをした給仕どもは敷石の、植木鉢を並べたあいだへ砂^{かき}をまいている。アブサントや葉巻や牡蠣の匂いがする。(下, p.188)

Des garçon en tablier versaient du sable sur les dalles, entre des arbustes verts. On sentait l'absinthe, le cigare et les huîtres. (p.531)

D-13

狭くて天井の低いこの部屋は、ストーブが、髪^{かつら}やボマードのいっぱい置いてあるなかにうなっているので暑苦しかった。鍍^ての匂いと、髪をいじる油手の匂いがいっしょになって、間もなくエンマは気が遠くなり、化粧着のまましばらくの間うとうとした。(下, p.192)

Il faisait chaud dans ce petit appartement trop bas, où le poêle bourdonnait au milieu des perruques et des pommades. L'odeur des fers, avec ces mains grasses qui lui maniaient la tête, ne tardait pas à l'étourdir, et elle s'endormait un peu sous un peignoir. (p.534)

D-14

やがてポンスの匂いと葉巻の煙で気が遠くなった。気絶しそうになった。皆が窓際へかついで行った。(下, p.236)

Puis l'odeur de punch avec la fumée des cigares l'étourdit. Elle s'évanouissait ; on la porta devant la fenêtre. (p.557)

D-15

そしてシャルルは、祈りと灯明^{とうみょう}の絶え間ない繰り返しのために、蠟と僧服の不快な臭いのために、今にも気が遠くなりそうだった。(下, p.317) et Charles se sentait défaillir à cette continuelle répétition de prière et de flambeaux, sous ces odeurs affadissantes de cire et de soutane. (p.600)

D-16

樹脂の香がする出来損ないのブドウ酒のように、にがみの交った喜びであった。(下, p.325-326)

plaisir tout mêlé d'amertume comme ces vins mal faits qui sentent la résine. (p.605)

E-1

彼女はその下で暖かい陽気^{ようき}にはおえみかけた。

もく木理のある張り切った傘の絹へ、雨だれのポツリポツリと落ちるのが聞こえていた。(上, p.29-30)

Elle souriait là-dessous à la chaleur tiède; et on entendait les gouttes d'eau, une à une, tomber sur la moire tendue. (p.307)

E-2

蠅が食卓の上で、飲み捨てたコップを伝ってのぼり、底に残ったリング酒のなかにはまりこんでブンブンいっていた。(上, p.36)

Des mouches, sur la table, montaient le long des verres qui avaient servi, et bourdonnaient en se noyant au fond, dans le cidre resté. (p.310-311)

E-3

彼の耳に聞こえるものは、自分の頭の中がズキンズキン鳴る音と、遠くの庭で卵を産む牝鶏の鳴き声ばかりであった。(上, p.37)

et il entendait seulement le battement intérieur de sa tête avec le cri d'une poule, au loin, qui pontait dans les cours. (p.311)

E-4

ときどき、生垣のむこうに鞭音が聞こえた。やがて柵がひらく。幌馬車がはいってくるのである。(上, p.43)

De temps à autre, on entendait des coups de fouet derrière la haie ; bientôt la barrière s'ouvrait : c'était une carriole qui entraît. (p.314)

E-5

しかしよく耳をすますと、野中を弾きつづける楽師の安ヴァイオリンが小止みなく聞こえた。(上, p.45)

et, en y prêtant l'oreille, on entendait toujours le crin-crin du ménétrier qui continuait à jouer dans la campagne. (p.316)

E-6

エンマの頭上、壁にかけたランプの反射鏡が、これら人の世のうつし絵を照らしていた。しずまり返った寝室のなか、まだ大通りを走っている帰りおくれた辻馬車の遠い響きとともに、絵は一枚一枚エンマの前を過ぎてゆくのであった。(上, p.61)

Et l'abat-jour du quinquet, accroché dans la muraille au-dessus de la tête d'Emma, éclairait tous ces tableaux du monde, qui passaient devant elle les uns après les autres dans le silence du dortoir et au bruit lointain de quelque fiacre attardé qui roulait encore sur les boulevards. (p.326)

E-7

よる夜中、肴屋が荷車に乗って、「マヨナラ^{ばな}花」の唄をうたいながら窓の下を通って行くと彼女は眼をさました。そして鉄の輪をはめた車輪のひびき、石を敷いたこの町なかをはずれると、土にふれてすぐ柔らかくなるその響きに耳を傾けながら。(上, p.89)

La nuit, quand les mareyeurs, dans leurs charrettes, passaient sous ses fenêtres en chantant la Marjolaine, elle s'éveillait ; et, écoutant le bruit des roues ferrées qui, à la sortie du pays, s'amortissait vite sur la terre : (p.343)

E-8

日曜日、晩禱の鐘の鳴るときはどんなに悲しかったか！ ひびのはいった鐘の音が一つずつ鳴り渡るのを聞くともなく一心に聞いていた。どこかの猫が屋根の上をのそのそ歩きながら、薄れ日に背中を丸めていた。風は街道の上に幾すじも土埃を吹いてゆく。時たま犬の遠吠えが聞こえた。鐘は同じ間をおいて一本調子に鳴りつづけ、調べは野づらに消えて行った。(上, p.99)

Comme elle était triste, le dimanche, quand on sonnait les vêpres ! Elle écoutait, dans un

hébètement attentif, tinter un à un les coups fêlés de la cloche. Quelque chat sur les tois, marchant lentement, bombait son dos aux rayons pâles du soleil. Le vent, sur la grande route, soufflait des traînées de poussière. Au loin, parfois, un chien hurlait : et la cloche, à temps égaux, continuait sa sonnerie monotone qui se perdait dans la campagne. (p.349)

E-9

朝に晩に、宿屋の馬が三頭ずつ通りを横切って沼へ水を飲みに行く。ときどき居酒屋の戸の鈴が鳴った。風があると、散髪屋の店の看板になっている真鍮しんちゆうの小さな金盥かなだらが、二本の棒にすれてきしむのが聞こえた。(上, p.100)

Soir et matin, les chevaux de la poste, trois par trois, traversaient la rue pour aller boire à la mare. De temps à autre, la porte d'un cabaret faisait tinter sa sonnette, et, quand il y avait du vent, l'on entendait grincer sur les deux tringles des petites cuvettes en cuivre du perruquier, qui servaient d'enseigne à sa boutique. (p.350)

E-10

入口の上方、パイプオルガンのあるはずのところに、男子用の棧敷さじきが設けてあり、そこには木靴のよくひびく廻り段がついている。(上, p.110)

Au-dessus de la porte, où seraient les orgues, se tient un jubé pour les hommes, avec un escalier tournant qui retentit sous les sabots. (p.356)

E-11

しかし女将はもう聞いてはいなかった。女将は遠くに響く車の音に耳を傾けていた。ゆるんだ蹄鉄ていてつが地面を打つひびきにまじって馬車の音がはっきり聞こえた。そして「つばめ」はようやく門前にとまった。(上, p.120)

Mais la maîtresse d'auberge ne l'écoutait plus :

elle tendait son oreille à un roulement éloigné. On distingua le bruit d'une voiture mêlé à un claquement de fers lâches qui battaient la terre, et l'*Hirondelle*, enfin, s'arrêta devant la porte. (p.362)

E-12

廊下には憲兵の頑丈な靴の音や、遠くの方で大きな錠前のしめるような音が聞こえた。薬屋の耳は、脳溢血で倒れるのではないかと思うほどガンガン鳴った。(上, p.134)

On entendait dans le corridor passer les fortes bottes des gendarmes, et comme un bruit lointain de grosse serrures qui se fermaient. Les oreilles du pharmacien lui tintèrent à croire qu'il allait tomber d'un coup de sang ; (p.370)

E-13

ふたりの前には蠅の群れが、暑い空気のなかにうなりを立てながら飛びかっていた。(上, p.142)

devant eux un essaim de mouches vlotigeait, en bourdonnant dans l'air chaud. (p.374-375)

E-14

レオンは日に二度ずつ事務所から「金獅子」へかよった。エンマは彼のやってくる足音を遠くから聞いた。身をこごめてじっと聞いた。(上, p.149)

Léon, deux fois par jour, allait de son étude au *Lion d'or* ; Emma, de loin, l'entendait venir ; elle se penchait en écoutant ; (p.379)

E-15

破風はふの小桁こげたにつけてある穂の交じった麦藁の束が、三色のリボンを風にはたはたと鳴らしていた。(上, p.155)

Attaché à la poutrelle du pignon, un bouquet de paille entremêlé d'épis faisait claquer au vent ses rubans tricolores. (p.383)

E-16

ある夕ぐれ、あけ放した窓べに坐って、エンマはいまさきまで寺男のレスチブードワがつげの木の刈り込みをしているのを眺めていたが、急に「御告の鐘」の鳴る音を聞いた。(上, p.170)

Un soir que la fenêtre était ouverte, et que, assise au bord, elle venait de regarder Lestiboudois, le bedeau, qui taillait le buis, elle entendit tout à coup sonner l'Angelus. (p.391)

E-17

はるか彼方には家畜が歩いていた。足音もなき声も聞こえなかった。そして鐘は果てもなく鳴りひびき、^{なかぞら}中空に平和な嘆きをつづけていた。

繰り返すこの鐘の音につれて、年若い女の想いは青春と寮生活の古い追憶のなかをさまよった。(上, p.170-171)

Au loin, des bestiaux marchaient ; on n'entendait ni leurs pas, ni leurs mugissements ; et la cloche, sonnant toujours, continuait dans les airs sa lamentation pacifique.

A ce tintement répété, la pensée de la jeune femme s'égarait dans ses vieux souvenir de jeunesse et de pension. (p.391)

E-18

布靴をはいた子供らはそれを自分たちが遊ぶための床と心得てさかんに走り回っていた。^{ゆか}殷々たる鐘の音を通して子供らの叫び声^{いんいん}が聞こえた。鐘楼の頂から垂れ下がって先を地に引きずっている大綱の揺れが小さくなるとともに、鐘の音も次第にかすかになって行った。燕が数羽、小さな鳴き声をあげながら通り過ぎ、鋭く風を切って軒瓦の下にある黄色い巣に急いで帰って行った。(上, p.172)

Les enfants en chaussons couraient là comme sur un parquet fait pour eux, et on entendait les éclats de leurs voix à travers le bourdonnement de la cloche. Il diminuait avec les oscillations de la gorsse corde qui, tombant des hauteurs du

clocher, traînait à terre par le bout. Des hirondelles passaient en poussant de petits cris, coupaient l'air au retranchant de leur vol, et rentraient vite dans leurs nids jaunes sous les tuiles du larmier. (p.392)

E-19

野づらには人影もなかった。ロドルフには靴にふれる規則正しい草の音と、遠く燕麦のかげにひそんでいる^{こおろぎ}蟋蟀の鳴く声のほかはなんの物音も聞こえなかった。(上, p.204)

La campagne était déserte, et Rodolphe n'entendait autour de lui que le battement régulier des herbes qui fouettaient sa chaussure, avec le cri des grillons tapis au loin sous les avoines ; (p.410)

E-20

捧げ銃をすると、銃身の帯金のゆるる音があたりに鳴り響いて、ちょうど銅の鍋が梯子段をころげ落ちるような音を立てた。捧げ銃がすむと銃はまた地上におろされた。(上, p.219)

Et, après un port d'armes où le cliquetis des capucines se déroulant sonna comme un chaudron de cuivre qui dégringole les escaliers, tous les fusils retombèrent. (p.419)

E-21

エンマは頭上に物音を聞いた。フェリシテが小さなベルトをあやすために、窓ガラスをコツコツ叩いているのだった。(下, p.11)

Elle entendit du bruit au-dessus de sa tête : c'était Félicité qui tambourinait contre les carreaux pour divertir la petite Berthe. (p.435)

E-22

彼の家から帰ってくるときには、おずおずとしてあたりを見廻して、むこうを通るものの様子や、人が見ているかもしれない村じゅうの天窓を一つ一つうかがった。足音や叫び声や鋤の音にも聞き耳をたてた。(下, p.23)

Quand elle s'en revenait de chez lui, elle jetait tout alentour des regards inquiets, épiait chaque forme qui passait à l'horizon et chaque lucarne du village d'où l'on pouvait l'apercevoir. Elle écoutait les pas, les cris, le bruit des charrues ; (p.442)

E-23

日ごろ法律を重んじるビネー氏がまさに違反行為を犯しているのだ。そこで彼には田舎警吏の足音がいつも耳についてならなかった。(下, p.24)

M. Binet, malgré son respect pour les lois, se trouvait en contravention. Aussi croyait-il à chaque minute entendre arriver le garde champêtre. (p.442)

E-24

敷石のうえをコツコツ歩く義足の音が遠くに聞こえと、シャルルはあわてて脇道へそれた。(下, p.62)

et quand Charles entendait de loin, sur les pavés, le bruit sec de son bâton, il prenait bien vite une autre route. (p.464)

E-25

エンマは娘のころに読んだ書物のなかへ、ウォルター・スコットの世界へ帰ったような心地がした。ヒースの茂みにこだまするスコットランドの風笛の音を霧のかなたに聞くような気がする。(下, p.119-120)

Elle se retrouvait dans les lectures de sa jeunesse, en plein Walter Scott. Il lui semblait entendre, à travers le brouillard, le son des cornemuses écossaises se répéter sur les bruyères. (p.495)

E-26

そして脇の礼拝所や、教会の小暗いところからは、高い円天井に反響しながら下りる格子窓の響きにつれて、ときおり、ため息のようなもの

がもれてきた。(下, p.148)

et, des chapelles latérales, des parties sombres de l'église, il s'échappait quelquefois comme des exhalaisons de soupirs, avec le son d'une grille qui retombait, en répercutant son écho sous les hautes voûtes. (p.510)

E-27

町の物音はいつとはなしに遠ざかった。荷車の音も、どよめく人声も、船の甲板に吠えている犬の声も。(下, p.176)

Les bruits de la ville insensiblement s'éloignaient, le roulement des charettes, le tumulte des voix, le jappement des chiens sur le pont des navires. (p.525)

E-28

幸福に酔った二人にはここが地上で一番すばらしいところに思われた。彼らが木立や青空や芝生を見、流れる水の音、葉蔭にそよぐ風の声を聞くのは、これがはじめてではなかったが、それらのすべてを心から讃美したことはおそらくかつてないことだった。(下, p.176)

Ce n'était pas la première fois qu'ils apercevaient des arbres, du ciel bleu, du gazon, qu'ils entendaient l'eau couler et la brise soufflant dans le feuillage ; mais ils n'avaient sans doute jamais admiré tout cela, (p.525)

E-29

なだらかな、かほそい声は波の上に消えて行った。そしてレオンは、風に運び去られる急速な節廻しが、羽搏きのように、身のまわりを過ぎて行くのを聞いていた。(下, p.177)

Sa voix harmoniseuse et faible se perdait sur les flots ; et le vent emportait les roulades que Léon écoutait passer, comme des battements d'ailes, autour de lui. (p.525)

E-30

声は、最初は弱く赤ん坊の泣き声のように、そ

れは闇のなかにながながと尾をひいた。鈴の音や木立のざわめきや箱馬車のうなりを通して聞くと、その声にはエンマの心を転倒させるような、はるばると遠いものがあつた。(下, p.194)
Sa voix, faible d'abord et vagissante, devenait aigüe. Elle se traînait dans la nuit, comme l'indistincte lamentation d'une vague détresse ; et, à travers la sonnerie des grelots, le murmure des arbres et le romflement de la boîte creuse, elle avait quelque chose de lointain qui bouleversait Emma. (p.535)

E-31

金属性のうなりが空中に尾をひいて、修道院の鐘の四つ鳴るのが聞こえた。四時だ！(下, p.223)

Un rôle métallique se traîna dans les airs et quatre coups se firent entendre à la cloche du couvent. Quatre heures! (p.550)

E-32

エンマはただ茫然とたたずんだ。血管の脈打つ音のほか、もうわれの意識はなかった。脈の音がからだをもれて、耳を聳する音楽のように、野にみなぎり渡るのが聞こえるような気がする。(下, p.274)

Elle resta perdue de stupeur, et n'ayant plus conscience d'elle-même que par le battement de ses artères, qu'elle croyait entendre s'échapper comme une assourdissante musique qui emplissait la campagne. (p.577)

E-33

教会堂の鐘が二時を打った。築山のすそ、闇のなかを流れている川のせせらぎの音が聞こえていた。(下, p.304)

L'horloge de l'église donna deux heures. On entendait le gros murmure de la rivière qui coulait dans les ténèbres, au pied de la terrasse. (p.593)

E-34

どこかで犬の遠吠えがつづげざまに長く尾をひいていた。

「犬の鳴いているのが聞こえますか」と薬剤師はいった。(下, p.308)

Des aboiements continus se traînaient au loin, quelque part.

《 Entendez-vous un chien qui hurle ? dit le pharmacien. 》 (p.595)

E-35

それからシャルルは二時間のあいだ、板に反響する金槌の音に苦しまねばならなかった。(下, p.311)

Alors, Charles, pendant deux heures, eut à subir le supplice du marteau qui résonnait sur les planches. (p.597)

E-36

鐘が鳴っていた。支度はよかった。いよいよ繰り出さねばならぬ。(下, p.314)

La cloche tintait. Tout était pret. Il fallait se mettre en marche. (p.599)

E-37

先に鉄をつけた杖で、同じくらいの間を置いては石畳をたたくようなカツカツという音が聞こえてきた。(下, p.315)

On entendit sur les dalles comme le bruit sec d'un bâton ferré qui les frappait à temps égaux. (p.599)

E-38

司祭たちや、唱歌者たちや、二人の少年歌手は『主よわれ深淵より』を誦していた。その声は高く低く波打ちながら野面に消えて行く。(下, p.316)

Les prêtres, les chantres et les deux enfants de chœur récitaient le *De Profundis* ; et leurs voix s'en allaient sur la campagne, montant et s'abaissant avec des ondulations. (p.600)

E-39

楽しそうな物音があたりにみちている。遠くの轍に沿って行く荷車のきしみ、しきりに繰り返す雄鶏のなき声、リンゴの木かげへ逃げ込む子馬の駢足の音。（下、p.317）

Toutes sortes de bruits joyeux emplissaient l'horizon : le claquement d'une charrette roulant au loin dans les ornifières, le cri d'un coq qui se répétait ou la galopade d'un poulain que l'on voyait s'enfuir sous les pommiers. (p.600)

E-40

ようやくゴトリという音がした。綱がきしみながら上がってきた。（…）すると棺の木に石ころがあたって、あの世のこだまかと思われるおそろしい響きを立てた。（下、p.318）

Enfin on entendit un choc ; les cordes en grincant remontèrent(...) et le bois du cercueil, heurté par les cailloux, fit ce bruit formidable qui nous semble être le retentissement de l'éternité. (p.600-601)

F-1

彼はうしろから、姿見のなか、二本の燭台の間にうつるエンマの姿を眺めていた。黒眼がひとしお黒く見える。耳の方へふくらとふくらんだ髪^{びん}の毛が烏羽色に光っていた。（上、p.77）

Il la voyait par derrière, dans la glace, entre deux flambeaux. Ses yeux noirs semblaient plus noirs. Ses bandeaux, doucement bombés vers les oreilles, luisaient d'un éclat bleu ; (p.336)

F-2

大使たちの社会では、ひとびとは鏡を張りつめたサロンのなか、金総^{きんぶさ}つきのピロードをかけた卵型テーブルのまわり、ピカピカ光った床の上を歩いている。（上、p.91）

Le monde des ambassadeurs marchait sur

des parquets luisants, dans des salons lambrissés de miroirs, autour de tables ovales couvertes d'un tapis de velours à crêpines d'or. (p.344)

F-3

本棚の塵をはらい、姿見に姿をうつし、一冊の本をとりだし、さて行間^{ぎょうかん}に白日の夢を追うては本を膝に落とした。（上、p.94）

elle époussetait son étagère, se regardait dans la glace, preneait un livre, puis, rêvant entre les lignes, le laissant tomber sur ses genoux. (p.346)

F-4

とすぐにワルツの曲がはじまるのである。オルゴールの上の小さなサロンには、指ほどの踊り手、ばら色のターバンをかむった女や、モーニング姿のチロル人や、燕尾服を着込んだ猿や短ズボンの紳士たちが、肘掛椅子、長椅子、渦形脚のテーブルの間をぐるぐる廻ると、それが細い金紙で角かどをつぎあわせたたくさんの鏡に映る。（上、p.101）

Une valse aussitôt commençait, et, sur l'orgue, dans un petit salon, des danseurs hauts comme le doigt, femmes en turban rose, Tyroliens en jaquette, singes en habit noir, messieurs en culotte courte, tournaient, tournaient entre les fauteuils, les canapés, les consoles, se répétant dans les morceaux de miroir que raccordait à leurs angles un filet de papier doré. (p.350)

F-5

日の光は、碎けてはつづく小さな青い水泡^{みなわ}を貫いていた。枝を払った古い柳が灰色の樹皮を水に映している。（上、p.146）

Le soleil traversait d'un rayon les petits globules bleus des ondes qui se succédaient en se crevant ; les vieux saules ébranchés miraient dans l'eau leur écorce grise ; (p.377)

F-6

寒くなりかけると、エンマは居間を捨てて広間の方に住んだ。天井の低い細長い部屋で、暖炉の上には枝のしげった珊瑚樹が姿見に寄せて置かれていた。(上, p.149)

Dès les premiers froids, Emma quitta sa chambre pour habiter la salle, longue pièce à plafond bas où il y avait, sur la cheminée, un polypier touffu s'étalant contre la glace. (p.379)

F-7

針を刺すと、血が走って姿見の鏡にサッとかなかった。(上, p.199)

Sous la piqûre de la lancette, le sang jaillit et alla s'éclabousser contre la glace. (p.407)

F-8

エンマはひとりであった。日はちょうど暮れようとしていた。寒冷沙の小さなカーテンが、窓ガラスに沿って宵闇の色を深めている。そして晴雨計の金箔には陽が射して、鏡のなか、さんご樹のぎざぎざした枝の間に燦爛とかがやいていた。(下, p.6)

Elle était seule. Le jour tombait. Les petits rideaux de mousseline, le long des vitres, épaississaient le crépuscule, et la dorure du baromètre, sur qui frappait un rayon de soleil, étalait des feux dans la glace, entre les découpures du polypier. (p.432)

F-9

本陣はなみなみと水をたたえた祝水盤にアーチの尖端やステンド・グラスのところどころを映している。しかしステンド・グラスの絵の影は大理石に当たって砕け、その向こうの敷石の上に、色とりどりの毛氈のようにつついていた。(下, p.148)

La nef se mirait dans les bénitiers pleins, avec le commencement des ogives et quelques portions de vitrail. Mais le reflet des peintuers,

se brisant au bord du marbre, continuait plus loin, sur les dalles, comme un tapis bariolé. (p.510)

G-1

貝殻細工の箱が一つ、たんすの上を飾っている。そして窓ぎわの文机の上には、白繻子のリボンでゆわえたオレンジの造化が水差しにさしてあった。それは花嫁の花束だった、先妻の花束だった！ エンマはそれをじっと見詰めた。シャルルは気がついて、それを取って納屋へ持っていった。エンマは脇掛椅子に腰かけて——エンマの持物はおいおい身のまわりにならべられた——ボール箱に詰めてある自分の持ってきた結婚の花束を思った。そして、もしひょっとして自分が死んだら、その花束はどうなるだろうと、とりとめもなく考えつづけるのであった。(上, p.52)

Une boîte en coquillages décorait la commode ; et, sur le secrétaire, près de la fenêtre, il y avait, dans une carafe, un bouquet de fleurs d'oranger, noué par des rubans de satin blanc. C'était un bouquet de mariée, le bouquet de l'autre ! Elle le regarda. Charles s'en aperçut, il le prit et l'alla porter au grenier, tandis qu'assise dans un fauteuil (on disposait ses affaires autour d'elle), Emma songeait à son bouquet de mariage, qui était emballé dans un carton, et se demandait, en rêvant, ce qu'on en ferait, si par hasard elle venait à mourir. (p.320)

G-1

結婚するまで、エンマは恋をしているものと信じていた。しかるに、その恋から当然くるはずの幸福がこないのは、自分の思い違いだったに相違ないと考えた。(上, p.55)

Avant qu'elle se mariât, elle avait cru avoir de l'amour ; mais le bonheur qui aurait dû résulter de cet amour n'étant pas venu, il

fallait qu'elle se fût trompée, songeait-elle.
(p.322)

G-2

もしもエンマが、商店街の店屋の奥に少女時代を過ごしたのであったら、エンマはおそらくこの時、普通ならば文章家の筆に移されてはじめてわれわれにおこる自然界の抒情的来襲に身をまかせたであろう。（上 p.57）

Si son enfance se fût écoulée dans l'arrière-boutique d'un quartier marchand, elle se serait peut-être ouverte alors aux envahissements lyriques de la nature, qui, d'ordinaire, ne nous arrivent que par la traduction des écrivains.
(p.324)

G-3

午後になると、ときどき広間の窓ガラスの向こうに男の顔があらわれた。顔は日に焼け頬髥は黒く、白い歯を見せてのどかに笑う。（上, p.101）

Dans l'après-midi, quelques fois, une tête d' un homme apparaissait derrière les vitres de la salle, tête halée, à favoris noirs, et qui souriait lentement d'un large sourire doux à dents blanches. (p.350)

G-4

その翌日はエンマにとってはうら悲しい一日であった。陰惨な雰囲気がすべてを包み、茫漠として物のおもてに漂うかと思えた。（上, p.191）

Le lendemain fut, pour Emma, une journée funèbre. Tout lui parut enveloppé par une atmosphère noire qui flottait confusément sur l'extérieur des choses. (p.403)

G-5

すると、前途に望んだ快樂のわずらわしさが、逆にいまの情婦のことを思い出させた。ルアン市の女優をかこっているのだった。思い出

しても堪能するようなその姿をじっと思い浮かべて彼はこう考えた。

「ああ、ボヴァリー夫人はあの女よりずっと美しい。とりわけずっとみずみずしい。ヴィルジニーの奴はたしかに太りすぎてきた。それに、あんなにはしゃがれるとうんざりしてしまう。おまけに小海老ばかり食っている！」（上, p.204）

Alors les encombrements du plaisir, entrevus en perspective, le firent, par contraste, songer à sa maîtresse. C'était une comédienne de Rouen, qu'il entretenait ; et, quand il se fut arrêté sur cette image, dont il avait, en souvenir même, des rassasiements :

《 Ah! Madame Bovary, pensa-t-il, est bien plus jolie qu'elle, plus fraîche surtout. Virginie, décidément, commence à devenir trop grosse. Elle est si fastidieuse avec ses joies. Et, d'ailleurs, quelle manie de salicoques ! 》 (p.410)

注

- 1) 『『ボヴァリー夫人』講義（上）』は『杉本紀子退職記念誌』に（はじめに、第1章. 光, 第2章. 影, 第3章. 埃, 煙, 霧, 靄, 雲, 湯気までを所収）、『『ボヴァリー夫人』講義（中）』は『流通情報学部紀要』に（Vol.17, No.2, 流通経済大学流通情報学部。第5章. 音, 第6章. 鏡までを所収）掲載を予定しています。
- 2) 邦訳の引用はすべて伊吹武彦訳の岩波文庫（上下巻, 1960年改版）。原文はPléiade版（Flaubert Œuvres 1, édition établie et annotée par A. Thibaudet et R. Dumesnil, GALLIMARD, 1967）。ゴチックによる強調と下線はすべて本稿著者による。邦訳（上 p.81）原文（p.338）
- 3) 邦訳（上 p.90）原文（p.343-344）
- 4) 邦訳（上 p.230-232）原文（p.425-426）
- 5) 邦訳（上 p.147）原文（p.378）
- 6) 日本語には「前味」という語はありませんが、フランス語のavant-goûtの直訳がもっともびったりくるのでこの造語を使わせていただきます。要するに後からくる本格的な味わい（肉体的官能の味わい）の先走りであり、時間的に先行するその分身です。
- 7) 邦訳（上 p.192）原文（p.403）
- 8) 邦訳（下 p.149）原文（p.511）
- 9) 邦訳（下 p.323）原文（p.603-604）

- 10) 邦訳（下 p.8）原文（p.433）
- 11) 邦訳（下 p.149）原文（p.510）
- 12) 邦訳（上 p.92）原文（p.345）
- 13) 邦訳（下 p.133）原文（p.502）
- 14) 『欲望の現象学』（ルネ・ジラルール著，古田幸男
訳，法政大学出版局，1971年）。原著はRené Girard,
Mensonge romantique et vérité romanesque. 1961,
Edition Bernard Grasset, Paris.
- 15) 邦訳（下 p.324-325）原文（p.604）
- 16) 邦訳（下 p.334-335）原文（p.610）
- 17) 邦訳（下 p.26）原文（p.443）
- 18) 邦訳（上 p.194）原文（p.404）
- 19) 邦訳（上 p.132）原文（p.369）
- 20) 「『ボヴァリー夫人』講義（上）」、『杉本紀子退職記
念誌』，p.47